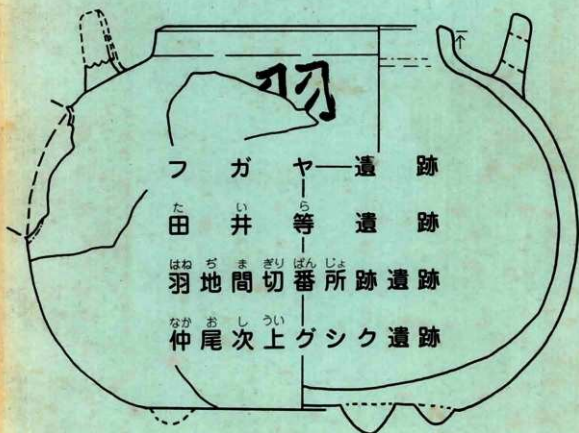


県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財
範囲確認調査報告書

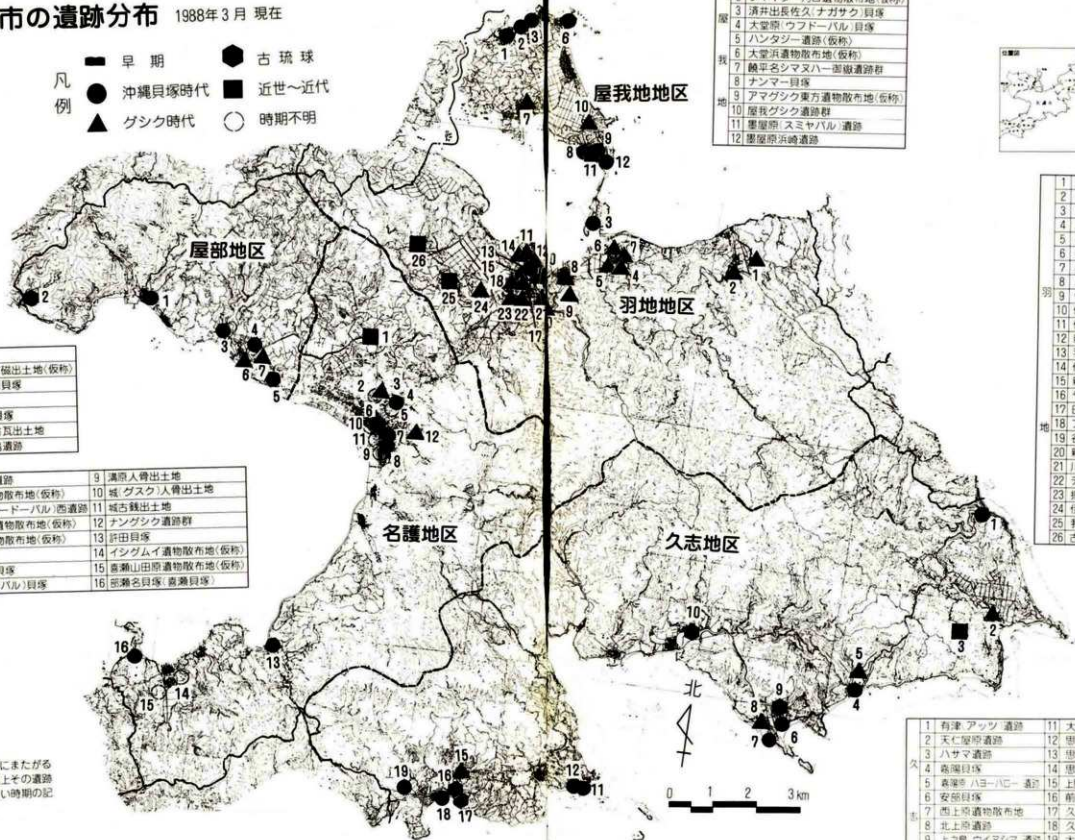


1988年3月

沖縄県名護市教育委員会

名護市の遺跡分布 1988年3月 現在

凡例
 ■ 早期
 ● 沖縄貝塚時代
 ▲ グシク時代
 ● 古琉球
 ■ 近世～近代
 ○ 時期不明



1 安和貝塚
2 部間崎現青堀出土地(仮称)
3 屋部前田貝塚
4 屋部貝塚
5 東兼久貝塚
6 屋部川口古瓦出土地
7 宇茂佐古島遺跡

1 宮里古島遺跡	9 満原人骨出土地
2 大西区遺物散布地(仮称)	10 城・グスク人骨出土地
3 大空原(ボーダーバル)遺跡	11 城古瓦出土地
4 大空原東遺物散布地(仮称)	12 ナンクシク遺跡群
5 大中区遺物散布地(仮称)	13 山田貝塚
6 名護貝塚	14 イシグミイ遺物散布地(仮称)
7 アハヌク貝塚	15 喜瀬山田原遺物散布地(仮称)
8 満原(ミズバル)貝塚	16 部間名貝塚(喜瀬貝塚)

1 満天原サバヤ貝塚
2 タキギター河口遺物散布地(仮称)
3 清井出長佐久ナガサク貝塚
4 大空原「ウードバル」貝塚
5 ハンタジー遺跡(仮称)
6 大空原遺物散布地(仮称)
7 船平シマヌハル遺跡群
8 ナンマー貝塚
9 アマグシク東方遺物散布地(仮称)
10 船原グシク遺跡群
11 聖原原(スミヤバル)遺跡
12 聖原原崎遺跡

1 瀬川村 シムラ 遺跡
2 赤河大・ウーグシク遺跡
3 赤武原遺跡
4 上之原遺跡
5 喜瀬原村社遺物散布地
6 阿波原遺物散布地
7 喜瀬原村社遺物散布地
8 川上ハースワイ遺跡
9 ウツラ原土器出土地(仮称)
10 仲尾次上グシク遺跡
11 仲尾古村遺跡
12 瀬川グシク遺跡
13 羽地関切番所遺跡
14 仲尾 ナハマ 遺跡
15 瀬川遺跡
16 ヤトバラ殿遺跡
17 田井原・チーヤ 遺跡
18 フガヤ遺跡
19 谷田 コクデン 遺跡
20 瀬川・ウーグシク遺跡
21 川上(ハースワイ)遺跡
22 デーグシク遺跡
23 振瀬名遺物散布地(仮称)
24 伊勢川古島遺跡
25 我部祖河瓦屋跡
26 古我知城築路

注：時期が複数にまたがる遺跡は、便宜上その遺跡のいちばん古い時期の記号を用いた。

1 有津・アツク 遺跡	11 大又遺跡
2 天仁原遺跡	12 里原佐久遺物散布地
3 ハサマ遺跡	13 里原石器出土地
4 喜瀬貝塚	14 里原・ウミバル 遺跡
5 喜瀬原(ハースワイ)遺跡	15 上原グシク遺跡・久志グシク
6 安原貝塚	16 前田原水田遺跡
7 西上原遺物散布地	17 久志古島遺跡
8 北上原遺跡	18 久志貝塚
9 上之原 ウイヌシマ 遺跡	19 大川田原遺跡
10 表手村野跡	

名護市文化財調査報告—8

県営仲尾地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財

—— 範囲確認調査報告書 ——

フ ガ ヤ 遺 跡

た い ら
田 井 等 遺 跡

はね ち ま ぎり ばん じょ
羽 地 間 切 番 所 跡 遺 跡

なが お し うい
仲 尾 次 上 グ シ ク 遺 跡

1988年3月

沖縄県名護市教育委員会

はじめに

本調査報告書は、県営仲尾地区土地改良事業に伴い、国・県の補助を得て、県文化課の協力を得ながら名護市が主体となって発掘調査を実施した成果の記録です。

北部農林土木事務所と当委員会との間で土地改良区内にある4遺跡について協議、調整をくり返した結果、フガヤ遺跡・田井等遺跡・仲尾次上グシク遺跡については盛土工法による保存、羽地間切番所跡遺跡については、土地改良区から除外するという措置をとることになりました。

羽地間切番所跡の保存をめぐる、親川区においては、区長をはじめ、地主をまじえた評議員会を開き、保存へ向けた話し合いが行われました。当委員会としても、何とか保存の方法はないものかと、文化財保存調査委員を中心に検討を行い、又、教育委員会会議においても、保存へ向けて話し合いがもたれました。発掘調査にあたっては、親川区をはじめ土地改良区の皆様の物心両面からのご協力を得、円滑に進行することができましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

最後に市内には80数ヶ所の埋蔵文化財が確認されていますが、そのほとんどがいまだに地域の広がりや、歴史的価値や性格が把握されておらず、文化財保護行政上の基礎的情報不足で問題となっています。今後とも、これらの文化財を市民の共有財産として保護、活用していくために、関係者並びに市民の御理解と御協力をよろしくお願い致します。

昭和63年3月

名護市教育委員会

教育長 比 嘉 太 英

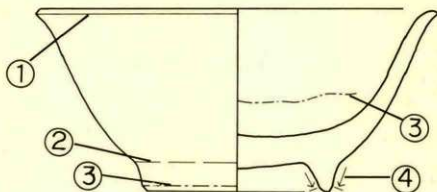
例 言

1. 本報告書は、県営仲尾地区土地改良事業に伴う遺跡の範囲確認調査の結果をまとめたものである。
2. 本事業の経費については、文化庁(80%)、沖縄県(10%)の補助を得た。
3. 範囲確認調査は、昭和60年から昭和62年度まで3ヶ年に亘って行われた。
4. 陶磁器の整理・分類については、佐賀県立九州陶磁文化館資料係長・大橋康二氏に指導、協力をお願いした。記して謝意を述べたい。
5. 遺跡の分布図は名護市役所発行の1/25,000の地形図によった。
6. 遺跡の位置図その他は、国土地理院発行の1/5,000国土基本図によった。
7. 本書の執筆・編集は以下のとおりである。

編集 寺田末子

執筆 島福善弘・松田博文

実測図の表現は以下に示すとおりである



- ① 稜線（明瞭な線であることを示す）
- ② 稜線（不明瞭な線を示す）
- ③ 釉葉のさかいを示す
- ④ 釉葉がかかっている範囲を示す

目 次

はじめに

例 言

I. 調査の目的と調査の経過	1
II. 調査の組織	2
III. 遺跡の立地	3
おわりに	132

フガヤ遺跡

I. フガヤ遺跡の位置と環境	4
II. 調査結果の詳細	
1. 発掘調査の範囲と方法	5
2. 層 序	6
3. 遺 物	
(1) 土 器	7
(2) 類須恵器	7
(3) 磁 器	8
(4) その他	8
III. 調査の成課と課題	20

田井等遺跡

I. 田井等遺跡の位置と環境	28
II. 調査結果の詳細	
1. 発掘調査の範囲と方法	29
2. 層序・遺構	30
3. 遺 物	
(1) 輸入陶磁器	31
(2) 沖縄製陶器	46
(3) 砥 石	51
(4) 古銭・キセル・ジファー	52
III. 調査の成果と課題	54

羽地間切番所跡遺跡

I. 羽地間切番所跡の位置と環境	68
II. 調査結果の詳細	
1. 発掘調査の範囲と方法	70
2. 層 序	71
3. 遺 構	72
4. 遺 物	
(1) 土 器	73
(2) 輸入陶磁器	73
(3) 沖縄製陶器	104
(4) その他	104
III. 調査の成果と課題	105

仲尾次上グシク遺跡

I. 仲尾次上グシクの位置と環境	118
II. 調査結果の概要	
1. 発掘調査の範囲と方法	119
2. 遺 物	
(1) 土器・播鉢	120
(2) 類須恵器	120
(3) 青磁・白磁	120
(4) 染 付	120
(5) 色絵・ルリ釉・陶器	120
III. 調査の成果と課題	127

I. 調査の目的と調査の経過

昭和59年、沖縄県北部農林土木事務所より、県営仲尾地区土地改良事業の計画が示され、その実施にあたり文化財の有無について当教育委員会に照会がなされた。

昭和61年度工事施行区域内に、フガヤ遺跡、田井等遺跡、羽地間切番所跡遺跡などの埋蔵文化財の存在が知られていたため、開発当局との調整資料を整えるため、遺跡の範囲確認のための発掘調査を行なうことになった。

昭和60年6月、調査体制が整った段階で、フガヤ遺跡の調査を皮切りに、田井等遺跡、羽地間切番所跡遺跡へと調査を進めていった。羽地間切番所跡遺跡については、キビの収穫が済み次第調査に入るということで、それまで待たなければならず、土地改良組合、北部農林土木事務所、市教育委員会で、再度話し合いを持ち、工事日程等について確認を行なった。番所跡は、村有地であったが、戦後親川区へ払い下げ、それをまた個人が買い受けるという所有権の移転があり、その度に土地の改変が行なわれていたことがわかった。10数年前の個人による土地改良工事のため、丘陵面が切られ、低地に盛土を行なったため、原地形をとどめるのは、低地の部分だけであった。

発掘調査においてこの盛土を除去しなければならず、バックホーも大型に変えなければ間に合わなくなった。結果的に番所跡の調査は、時間と調査費用の面から昭和61年度までずれ込む形となった。昭和62年度工事施行区には、仲尾次上グシク遺跡が含まれており、キビの収穫が済みしだい調査に入ることになった。拝所を中心とした本体部は工事区域からはずしている為周辺のキビ畑を中心に調査をはじめた。

県営仲尾地区土地改良区は、羽地でも、もっとも高密度に遺跡が分布する場所であるだけに、遺跡保存の上で、大きな地形の変化を伴うような開発は行なわないよう調整したが、地主の了解を得ることができなかった。しかし、羽地間切番所跡に関しては、親川の公民館で地主を交えての説明会を開催し、土地改良組合、親川区評議員、名護市役所、市教育委員会の合意のもとに土地改良区から除外する措置がとられたことは一つの成果である。このような広域に及ぶ開発においては、遺跡の分布すら把握されないまま消滅していく状況があることが十分予想され、改めて、埋蔵文化財等の所在等について可能な限り詳細な情報を早期に把握する作業が緊急の課題とされた。

Ⅱ．調査の組織

調査総括	名護市教育委員会 教育長 比嘉太英	調査責任者	名護市教育委員会 社会教育課長 仲宗根武夫
------	----------------------	-------	--------------------------

事務局 大兼久武、稲嶺進、玉城政光、宮城道子

フガヤ遺跡	総務	名護市教育委員会 事務主事 平良芳一	調査員	沖縄県教育庁文化課 専門員 岸本義彦
-------	----	-----------------------	-----	-----------------------

田井等遺跡	総務	同上	調査員	同上
-------	----	----	-----	----

羽地間切番所跡遺跡（１次）

総務	同上	調査員	同上
----	----	-----	----

羽地間切番所跡遺跡（２次）

総務	名護市教育委員会 事務主事 島福善弘	調査員	同左
----	-----------------------	-----	----

仲尾次上グシク遺跡

総務	名護市教育委員会 事務主事 島福善弘	調査員	同左
----	-----------------------	-----	----

発掘作業員（フガヤ遺跡、田井等遺跡、羽地間切番所跡遺跡、仲尾次上グシク遺跡）

大城すえ、照屋ふさこ、末吉ヨネ、松田律子・金城絹代、小橋川キヨ、玉城ヨシ子
松田千代子、山城艶子、宮城和子、嘉手苅ノブヨ、松田キク、上間さえ子、宮城達
子、親川フジ子、宮城節子、新城トミ、當間まゆみ、大城さつき、照屋貢、東江慶
彦、親川桂、伊波興吉、島袋直喜、宮城統、仲尾文雄、松田古子、宮城勝

資料整理

比嘉淳子、久場川恵子、屋嘉充男、比嘉芳江、新里昭乃、大城智代美、安里文枝

実測・トレース

松田博文、仲村美代子、玉城留美子、寺田末子、宮里末廣、上間恵子

遺物写真撮影

比嘉武則、比嘉良則

Ⅲ. 遺跡の立地

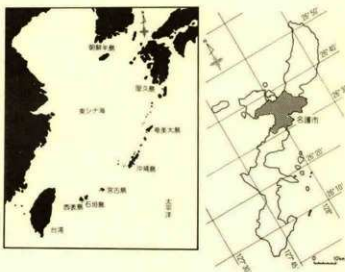
名護市は、1970年8月に、名護町、屋部村、屋我地村、羽地村、久志村の5町村が合併して出来た県下9番目の市である。

名護市を構成する旧町村の一つである羽地村に、それらの遺跡は含まれる。沖縄島北部の東シナ海につき出た本部半島の基部にあたるのが名護市だが、その中でも北西に位置し、羽地内海に面し、その北方では大宜味村、東村とも境界を接するのが羽地の位置である。

フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽地間切番所跡遺跡・仲尾次上グシク遺跡のある一帯は古くから羽地にとどまらず国頭郡においても行政における中心的役割をになってきた場所である。旧久志村とは東側において接するが、その中央を国頭山地が連なり羽地大川などの河川が流れ出て羽地内海に注いでいる。それらの河川が下流に低地を形成するが、その低地に立地する遺跡が、フガヤ遺跡、田井等遺跡などである。

また、羽地間切番所跡遺跡は、親川部落の西側丘陵上にあり、田井等のアサギから親川ガシクに至る神道と呼ばれる線上に連なるように存在する。

仲尾次上グシク遺跡は、羽地中学校の北側背後の標高40数メートルの丘陵を形成する緑豊かな場所に、ウイグシク、ナカグシクと呼ばれる2つの拝所を中心に広がる。



第1図 名護市の位置

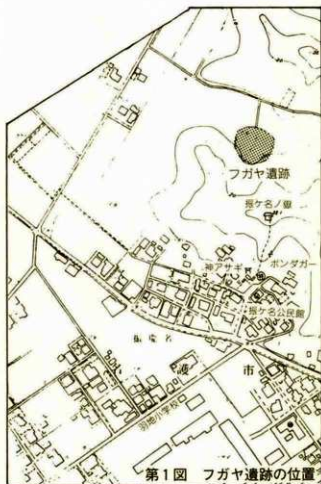
フガヤ遺跡

I. フガヤ遺跡の位置と環境

振慶名部落から仲尾へぬける農道がある。その農道の東側にフガヤと呼ばれる小さな谷がある。振慶名の御嶽の北側に位置し、小谷の南側斜面下の畑を中心に一帯のキビ畑や、菊畑からグスク土器、類須恵器、陶磁器などが表面採集される。

牛舎周辺のキビ畑は標高10m内外の斜面をなしているが、そのなかからも少量ではあるが陶磁器が表採できる。その南側の菊畑として利用されている低地において最も多くの遺物が採集される。しかし、そこは、旧水田跡で周辺の斜面をけずり埋土したものである。南側斜面下の畑がたしかに多くの遺物を出土したが、周辺の高台にも遺跡が広がっていたものと思われる。

発掘調査の結果では、南側斜面下の畑でのみまとまって遺物が出土した。

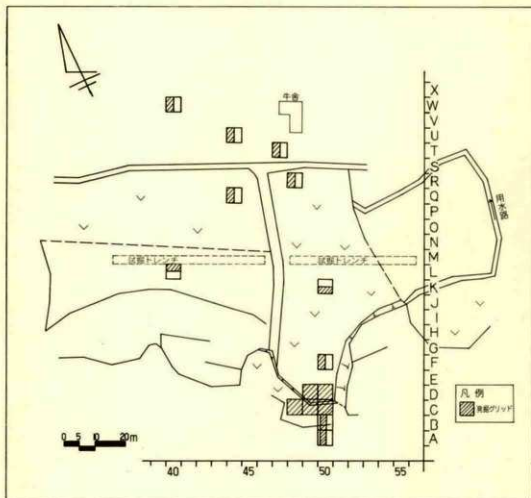


Ⅱ．調査結果の詳細

1. 発掘調査の範囲と方法

遺跡のひろがりをつかむのを目的に、東西に試掘トレンチを、そして、第2図のようなグリッドを設定し、調査区を広げていく方法をとった。

低地の水田跡や、小高いキビ畑など広い範囲にわたって遺物が採集されるための措置である。遺物を包含する層は南側の斜面下で最も顕著に観察され、旧水田跡には遺物を含む層は認められず、周辺からの流れ込みによるものであらうと思われた。したがって、調査の方向も低地部分から周辺の高台のほうへと進めることになった。



第2図 フガヤ遺跡 グリッド設定図

2. 層 序

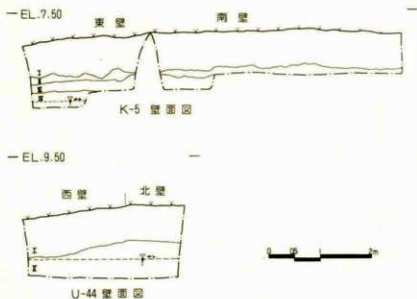
フガヤ遺跡は、調査地域の全域が水田跡や、キビ畑等でトラクターなどにより整地等が行なわれ攪乱が著しい。周辺の斜面を切りくずして水田を埋めてあるので、水田跡からはほとんど遺物は出土しない。表面採集においては、土器、陶磁器が得られた。遺物を包含する層は南側斜面下の畑のみである。以下、各層の状況を述べる。

水田跡

- I層（茶褐色混礫土層）：水田を埋めている客土で周囲の斜面を切りくずして埋土したもの、国頭礫層。
- II層（黒色粘土層）：旧水田の表層部、緑肥が腐植している。
- III層（青灰色粘土層）：旧水田の耕土、遺物をまったく含まない。
- IV層（茶褐色粘土層）：旧水田の床面

水田以外の畑

- I層（暗褐色土層）：表土層で礫をほとんど含まない。
- II層（茶褐色混礫土層）：いわゆる地山、国頭礫層。



第3図 層序断面図

3. 遺物

フガヤ遺跡から出土する遺物には、土器、類須恵器、陶磁器などがある。遺物の出土するグリッドはD-49、D-50、C-48、C-49、C-50などに限られ、他の場所は表採はできるが、層のなかからの出土は極端に少ない。以下、各項目について述べる。

(1) 土器 (第4～9図)

出土した土器は小破片で、器形が推定できるのも数点あるが、ほとんどは器種の推定が困難な資料である。

第4図に示したのは、胴部の破片でいずれも器種の推定は困難であるが、器面調整が雑で、どちらかというとき器壁は厚手のものが多い。

第5図①～③は、把手付きの石鍋を模倣したものと考えられ、久志貝塚や熱田貝塚などの出土品と類似する。①の土器は瘤の部分に横穴が穿たれ、久志、熱田の標品には例をみない。焼成は良く、胎土は細かい。口唇は平たく整えてある。②、③は瘤が簡略化している。

⑥～⑩は滑石粉^{カク・セキ}を混和材として使用した土器で、すべすべした手触りがある。

第6図～第8図は、口縁部を示してあるが、器種については、壺形か鉢形と思われる。多くは小破片のため器種を知り得るのは困難である。

口唇部の形態については、丸味を成形するものと平坦なものがある。

第9図は底部を示した。表採品もあわせてほとんどが平底に分類される。器厚は1cmぐらいが最も多い。底面から胴部への立ち上がりは、丸味をおびている。底径のわかる標品はない。

(2) 類須恵器 (第10～11図)

今回の発掘調査で出土したのは、19点で分布調査で1点表面採集された。

第10図の①は口径が復元できた唯一のもので、約8.5cmを測る。内外器面に成形時の回転調整痕が横方向に見られる。②は、内外器面に叩き文が認められるが口唇に近いところは、磨で撫で消してある。⑥は、外器面に格子目叩き文があり内器面は磨削りで仕上げてある。⑦は、逆に、内器面に格子目叩きを残し、外器面を磨で消した例である。⑨は、底部で、底面からの立ち上がりは、外面に大きく開いた状態である。外器面に叩き目が見られ、内器面は磨削りで仕上げる。器色は外器面が灰色で内器面は

茶色。

第11図の③は、波状文を施したもので内器面には格子目叩きを残す。また、同図⑩も波状文を有するものであるが、横位に区画線が入る。内器面は髹などで仕上げてある。同図⑧、⑨は、外器面に条痕文を施文するものである。

以上、主なものを述べたが、まとめると①、醜等による削りで丁寧に仕上げるもの。②内外器面に叩き目などを残すもの。③器面に叩き目などが見られないもの。④波状文を有するもの。⑤条痕を有するもの。という分類がなされた。

(3) 磁器 (第12・13図)

陶磁器類は、中国、本土産の磁器と沖縄産の陶器が出土した。この項では、中国、本土産の磁器について述べる。

第12図・13図に示した遺物に関する特徴を第1表で示した。

磁器についての資料からは、15世紀～17世紀の遺物が欠落するものの、12世紀～19世紀に至る青磁や染付が出土している。遺跡との関連は、今後の研究課題である。しかしながら、グスク土器や、類須恵器、石鍋の模倣土器等の出土をあわせて考えると、12世紀～14世紀にかけてのムラが存在したことが考えられ、出土遺物も量的には、グスク時代のものが主体を占める。

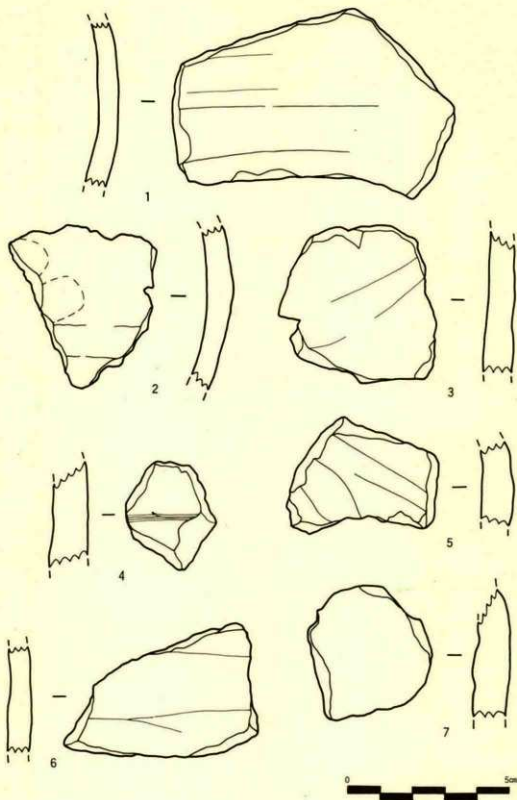
(4) その他 (第14図)

調査地区内から近世・近代の遺物が得られた。金属製品の破片①、②やキセルの吸口③など。その他、獣骨なども得られたが、ここでは割愛した。

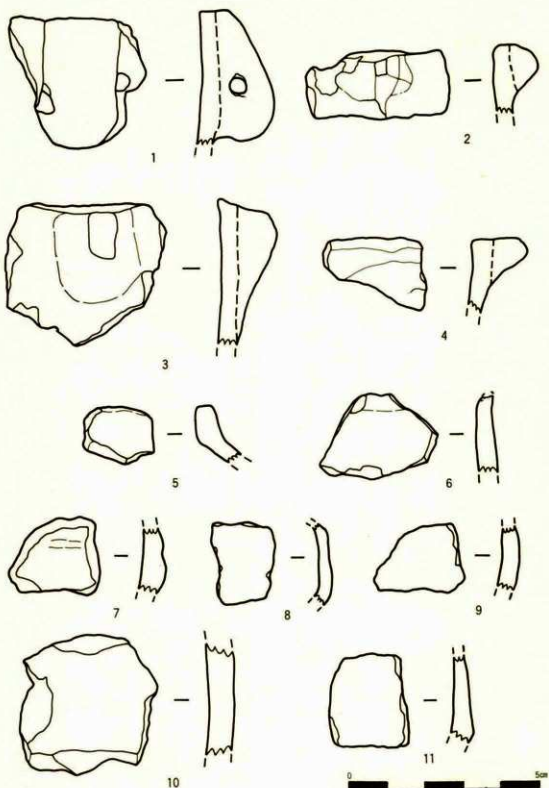
第1表 一第12、第13図に対応する分類表一

[illegible]

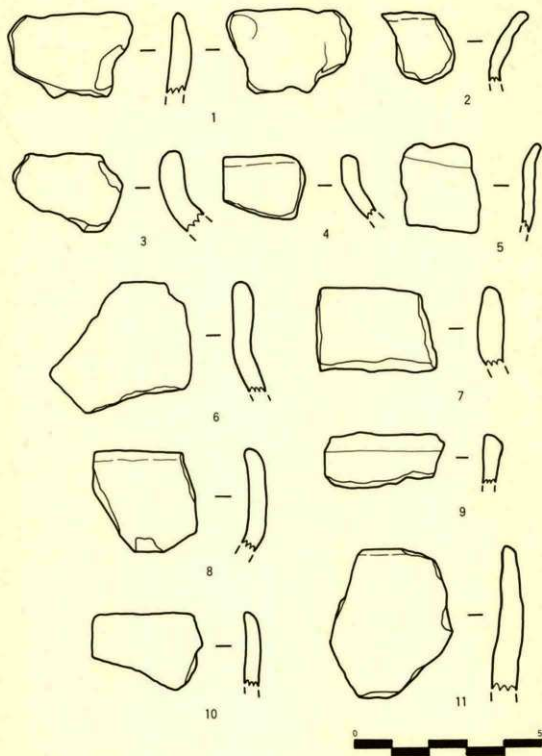
器種		年代	備考
磁器	白磁・碗 ①	※ 国産 14C 前半	寿永文 銘下は不明
	青磁・小碗 ②	※ 山口山崎窯所 国産・鎌倉末・明治一	
	③	※ 国産 18C ~ 19C	
	染付・碗 ④	国産・寛文末	
	⑤	国産・寛文末	
	⑥	明治後半 ~ 大正 朝鮮産	



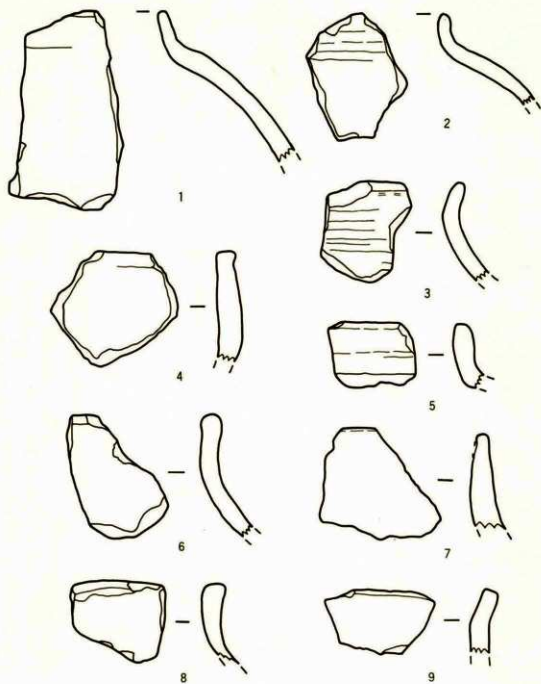
第4図 (図版-1) 土器 (胴部)



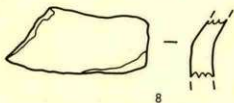
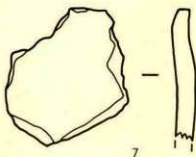
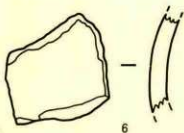
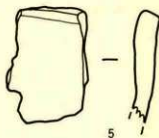
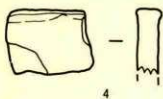
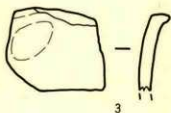
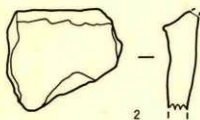
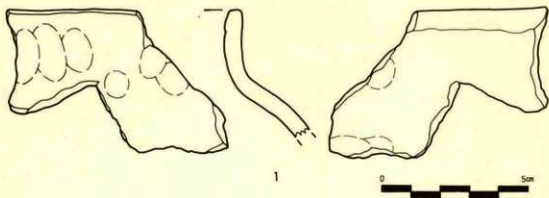
第5図 (図版-1) 土 器 (口縁部)



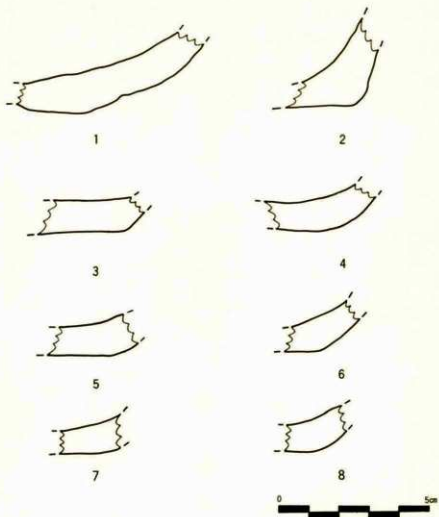
第6図 (図版-2) 土 器 (口縁部)



第7図 (図版-2) 土 器 (口縁部)



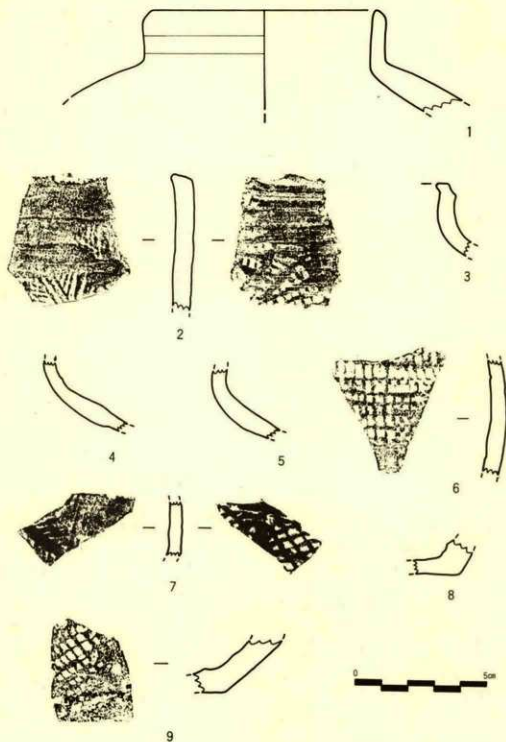
第8図 (図版-3) 土 器 (口縁部)



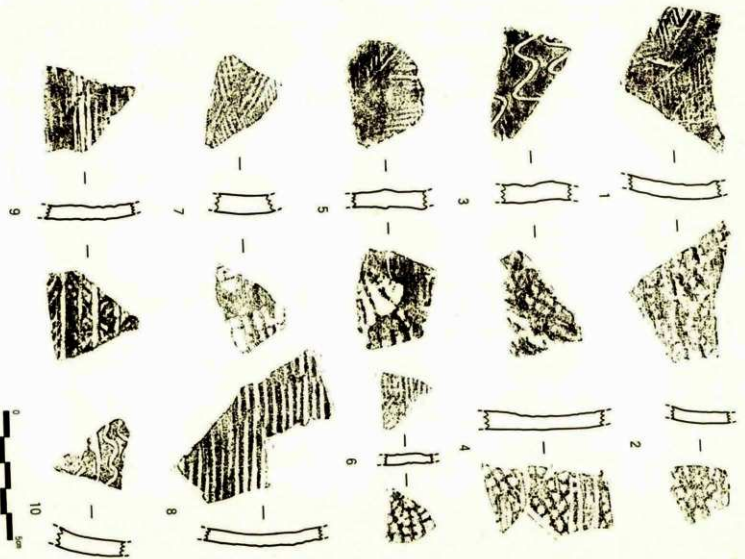
第9図 (図版-3) 土 器 (底部)



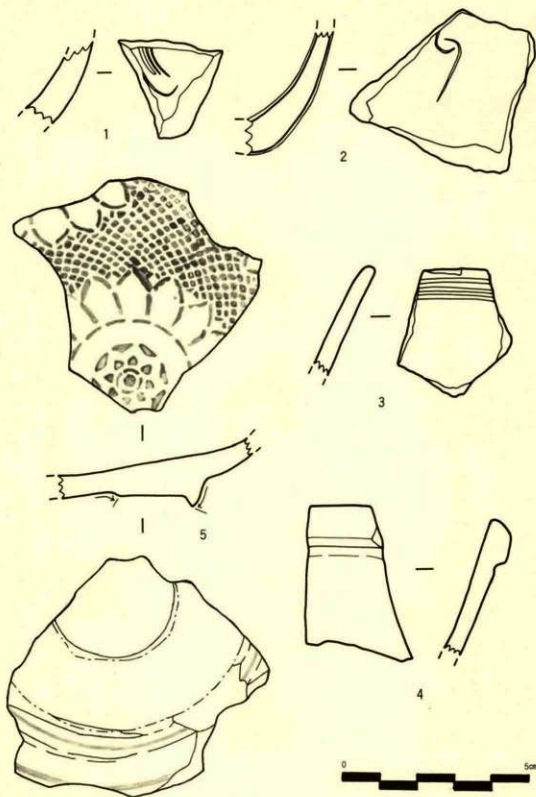
— フガヤ遺跡
発掘風景 —



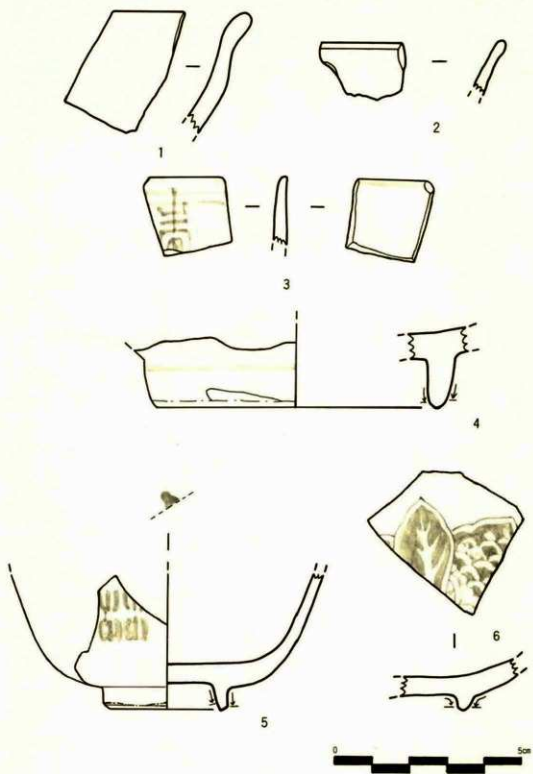
第10圖 (圖版-4) 類須惠器



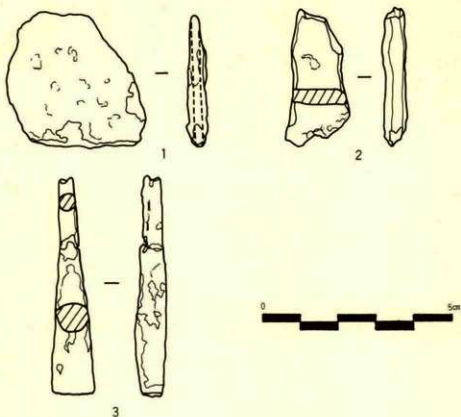
第11圖 (圖版-4) 類須惠器



第12図 (図版-5) 磁器



第13图 (图版-6) 磁器



第14図 (図版-5) その他(金属製品・キセル)

Ⅲ. 調査の成果と課題

フガヤ遺跡は低地に立地する遺跡であるが、この谷の南側斜面には、今大戦の戦跡遺跡とも言える防空壕がいくつか残っている。

すでに述べてきたように、この調査は「県営仲尾地区土地改良工事」に伴う範囲確認調査であり、開発当局との調整資料を整えるため工事施行区域内にある遺跡の拡がりと性格を把握することがまず第1の課題であった。

遺物が表面採集できる範囲については可能な限り試掘トレンチを設定するなど、包含層の確認につとめた。その結果、遺物包蔵地は、低地部の南側斜面下の畑に限られ一応のラインが把握された。

遺物については、県内出土の中国磁器で最も古いとされる、いわゆる玉縁口縁の白磁、また画花文を有する12世紀から13世紀にかけての青磁などが出土した。

また、石鍋を模倣したと思われる瘤付土器、そして、滑石粉を混和材として使用した土器、壺形土器、類須恵器等の出土から編年的位置づけはグスク時代開始期に相当するのではないかと考える。

グスク時代の遺跡は、丘陵地に石囲いをするなどして立地するのがよく知られた形だが、当該期の低地に立地する遺跡として、久志貝塚、恩納村の熱田貝塚があげられる。しかし、前記2遺跡は砂丘系の遺跡であるのに対し、フガヤ遺跡は小さな谷の中に存在する。

これらの遺跡が、その北方に位置する親川グスクのような、石垣囲いを有するグスクへ進出していく、その発展過程の遺跡として捉えるのが今後の重要な研究課題である。



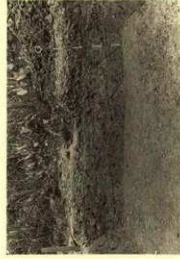
表土除去作業



炎天下での発掘作業



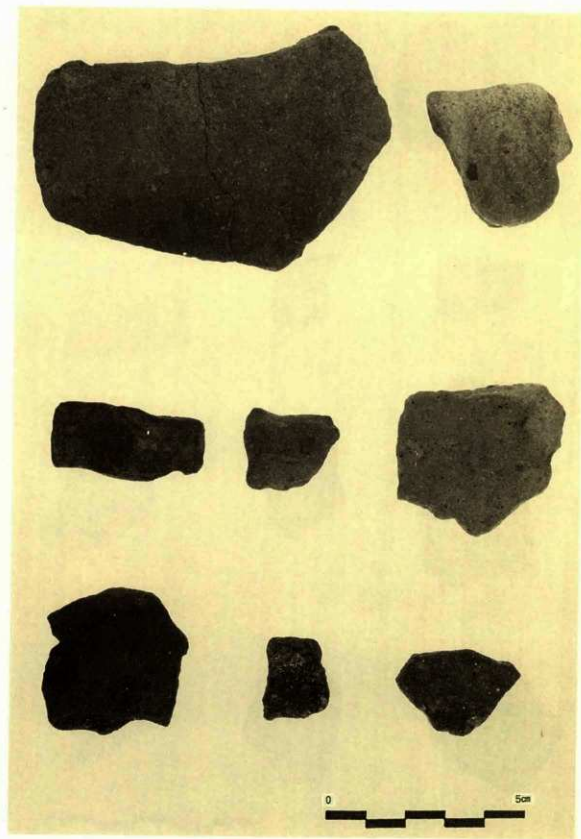
D-49、D-50 発掘終了



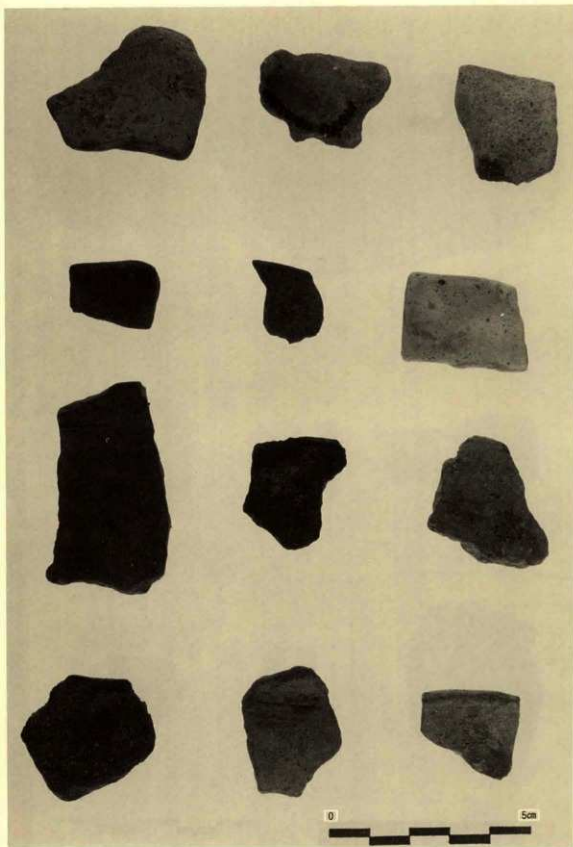
壁面



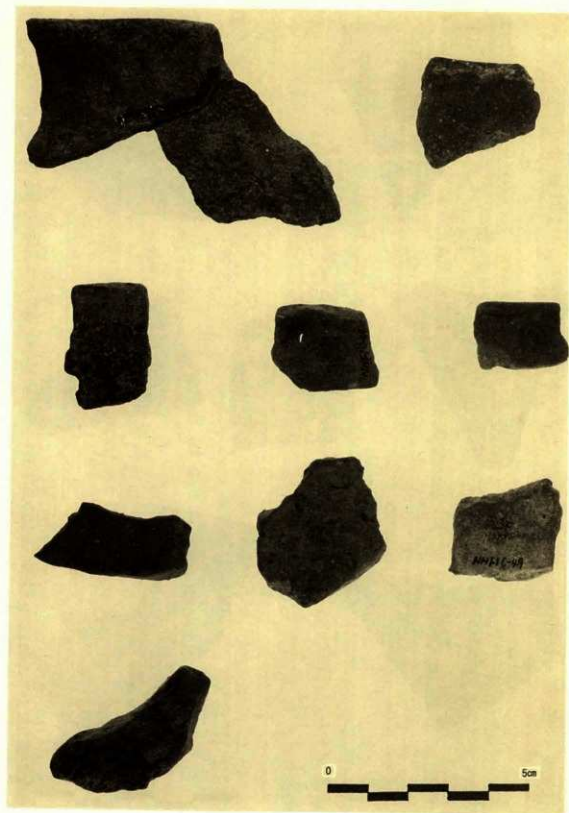
F-50 試掘グリッド



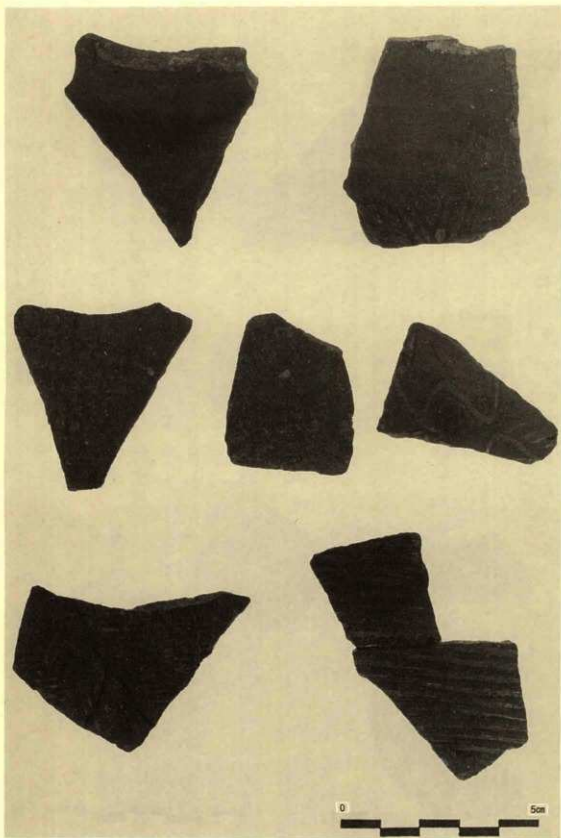
図版-1 土器(胴部・口縁部)



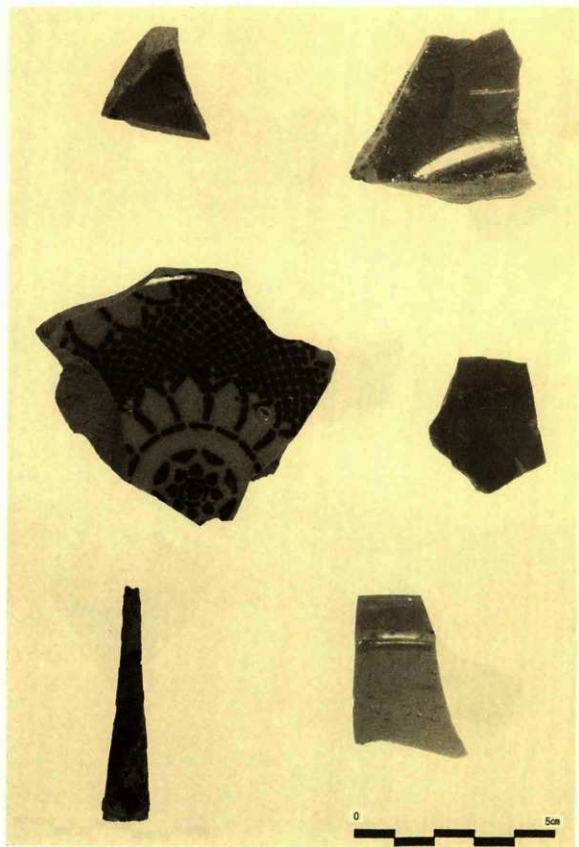
図版-2 土器（口縁部）



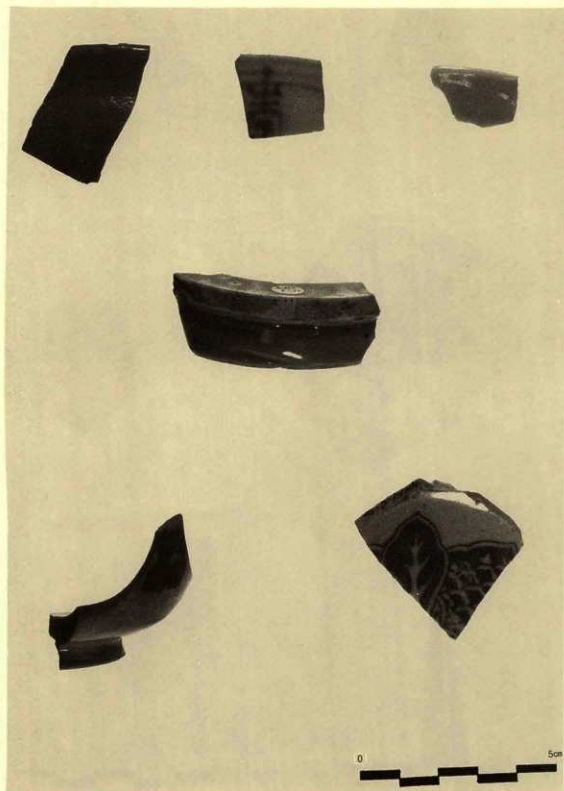
圖版-3 土 器 (口緣・底部)



図版-4 類須恵器



図版-5 磁器・キセル



圖版-6 磁 器

田井等遺跡

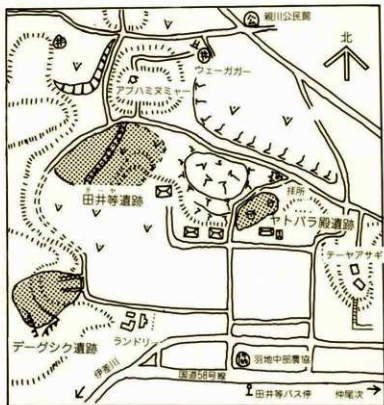
I. 田井等遺跡の位置と環境

田井等のアサギから親川グシクまで^{カミヌサ}神道で結ばれている。ほぼその中間に当たる所に、親川部落と田井等部落の拝所である^{ハミヌミヤ}神の宮がある。

田井等遺跡は、神の宮から親川グシクに向かって左手の方に広がる低地一帯である。田井等のアサギを起点に、ハミヌミヤ、デーグシク、^{ハンジイ}神所屋敷、^{ウドン}羽地間切番所跡、御殿屋敷、親川グシクと神道を軸にグスク時代～近世の遺跡が連なる。

『田井等村は王府時代～明治41年の村名。間切番所がおかれたが、親川村を分村し、間切番所は親川村内となった。分村の時期については、乾隆元年(1736)蔡温の施策によるという説があるが、未詳』『日本地名大辞典』

このことは、今でも、テーヤ・ウェーガーと連称され、もともと一つのムラであったことを裏づけているようだ。田井等遺跡が現在の田井等部落の元村だといわれている。



第1図 田井等遺跡の位置

Ⅱ. 調査結果の詳細

1. 発掘調査の範囲と方法

田井等遺跡の範囲を4地区に分け(第2図)包含層の確認と遺構の検出を課題に試掘トレンチを設け、発掘作業を進めた。水田は調査区から除外した。

地区設定は、以下のとおりである。

Ⅰ地区 田井等305、307、312、320、321、322番の畑

Ⅱ地区 田井等301番の畑

Ⅲ地区 田井等273、274、275、276、277、278、279番の畑

Ⅳ地区 田井等314番の畑

Ⅰ地区は小高くなったサトウキビ畑で、保存状態はいいものと思われたが、試掘の結果、遺物の出土は少なく、遺構についても確認できなかった。

Ⅱ地区は、南西側に傾斜をなす畑であるが、傾斜尻のほうは水田跡で埋土したのがわかった。表採の段階では最も多くの遺物が得られたが、大きく削土されているのが確認された。

Ⅲ地区は、調査中にトラブルがあり、調査を中断しなければならなかった。土地改良計画では盛土工法によることが決っていたので、破壊されることはないということで今回の調査範囲からはずした。

Ⅳ地区は、キビ畑の休耕地でススキが2m以上伸び、伐採作業にひと苦労したが、この地区が最も保存状態がよく、遺物はほとんどこの地区からの出土である。

この地域でも東側の斜面で今大戦の防空壕が3ヶ所確認された。



2. 層序・遺構

(イ) 層序

田井等遺跡は、調査地域の全域がキビ畑や、菊畑で個人による土地改良等が行なわれ攪乱が著しい。遺物包含層はⅠ～Ⅲ層の3枚を基本層位(地山を含む)とする。

ここでは、本報告の大多数の遺物が得られたⅣ地区について述べる。

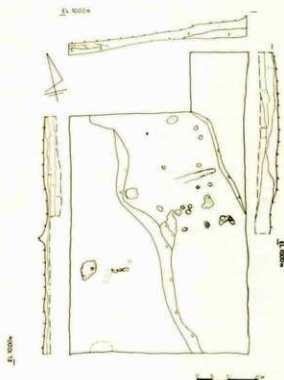
Ⅰ層 キビ畑の畝などのある耕作土層である。遺物を含むが、若干、沖縄製陶器が目立つ。中国製、本土製の陶磁器が混在する。

Ⅱ層 本遺跡の本来の文化層であるが、土の切り返しが行なわれており、地山直上より、近・現代遺物が出土した。

Ⅲ層 国頭マージでいわゆる地山である。柱穴らしきものも検出されたが、大部分が攪乱を受けているため平面プラン等については、まったく不明の状態であった。

(ロ) 遺構

溝状の遺構の一部が検出でき、また柱穴と思われるピットが数個みられたが、攪乱の状況が地山に達しており、遺構の平面形をおさえるのは困難をきわめた。



第3図 遺構平面及び土層壁面図



田井等遺跡遺構検出状況

3. 遺物

(1) 輸入陶磁器

青磁・白磁・染付・色絵・釉下彩〔コバルト(呉須)の含料による釉下彩を染付と呼ぶがそれ以外のクロムなどの含料によって彩色したものを釉下彩と称し区別する〕陶器などが出土している。各遺物に関する事項は対称表に器種、製作地、年代、特徴を記し説明した。対称表に盛り込むことのできなかった事項について各図ごと以下に述べる。

(イ) 第4図

①は、素地は淡褐色。高台内蛇ノ目釉ハギ、他は全釉。釉色は酸化焰焼成による緑褐色を呈する。⑤は、素地灰色を呈する、高台無釉。

皿は、⑬～⑳の5点あるが、㉑の1点は肥前系である。中国製と比較して高台部畳付の巾が広いのが特徴。

(ロ) 第5図

①は、焼成不良のため釉が剥離。①、⑤、⑥、⑧、⑭とも畳付無釉。

(ハ) 第6図

中国製の印判手の染付碗で17世紀後半～18世紀にかけての標品である。

(ニ) 第7図

①は、文様の構成を知り得ないが、内面に魚文が配されるタイプのものである。

⑥は、外面に文字を染付している。

(ホ) 第8図

①～④は碗、⑤～⑫は小坏であるが、高台畳付はいずれも無釉。⑥、⑦、⑪は畳付に砂が付着。

(へ) 第9図

瓶、蓋物を示した。④は同一個体と思われ、鳳凰に雲文の組み合わせの文様がみられる。口縁部の内面は無釉。

(ト) 第10図

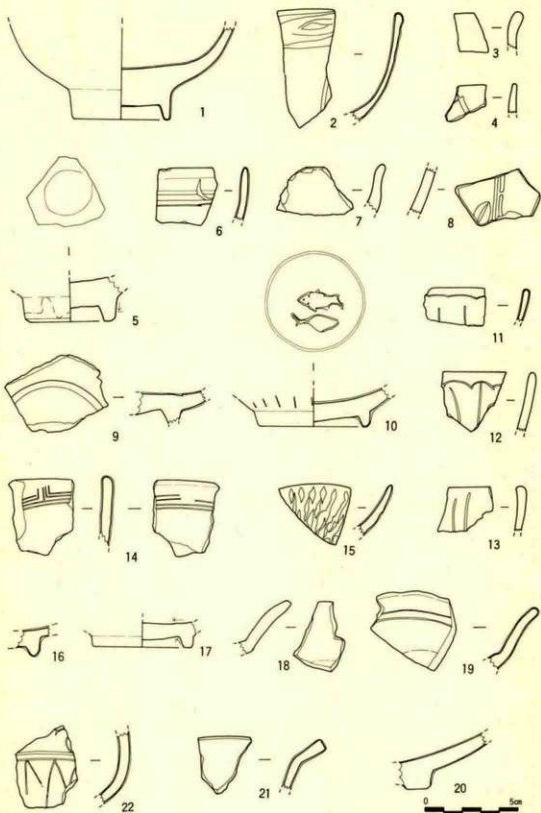
染付の皿、色絵、釉下彩である。⑪は口唇部無釉。⑫は、絵付が剥落。

(チ) 第11図

陶器である。②は、内外に鉄釉を施釉。高台は無釉。③は、外面に銅緑釉、内面は透明釉。

第1表 田井等遺跡出土の陶磁器年代表

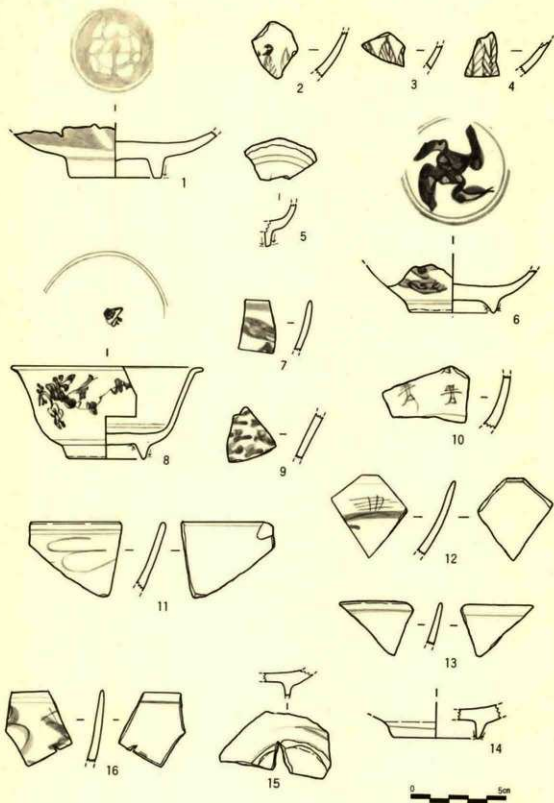
年 代		中 国 磁 器	日 本 陶 磁 器	タ イ
14世紀	前 半			
	後 半			
15世紀	前 半			
	後 半			
16世紀	前 半			
	後 半			
17世紀	前 半			
	後 半			
18世紀	前 半			
	後 半			
19世紀	前 半			
	後 半			



第4图 (图版-1) 青磁

第2表 第4図に対応する分類表

磁器	青磁	碗	器種	年代	備考
			① — 中	国 — 14C末～15C	慶家・福建系
			② —	—	□縁部へう描き雲文帯
			③ —	— 14C末～15C前半	□縁外反(慶家・福建系)
			④ — 中	国 — 14C後半～15C前半	外面へう描き蓮井文
			⑤ —	— 14C末～15C	
			⑥ —	— 14C末～15C中葉	
			⑦ —	— 14C後半～15C	□縁内反
			⑧ —	— 14C末～15C中葉	内面型押し隔列文
			⑨ — 中	国 — 15C～16C前半	福建系
			⑩ —	— 15C中～16C中	模造蓮井 見込に双魚文印花 慶家・福建系
			⑪ —	—	模造蓮井 見込に双魚文印花 慶家・福建系
			⑫ —	— 15C後半～16C前半	外面刺先蓮井文を模造き
			⑬ —	—	外面刺先蓮井文を模造き
			⑭ — 中	国 — 15C～16C	□縁部に雲文帯を印花? 慶家
			⑮ クロム青磁小碗	瀬戸・美濃系 — 明治～大正	
			⑯ — 中	国 — 14C後半～15C前半	
			⑰ —	— 15C～16C前半	模花形皿
			⑱ — 中	国 —	□縁内面、刺描文、模花形皿
			⑲ —	—	
			⑳ 茶碗	前 — 1630年代～50年代	
			㉑ 皿	国 — 14C末～15C	
			㉒ 茶碗(茶碗)	— 14C後半～15C前半	広口の西、縁の部分にへう描きの蓮井(慶家系系、香か箱?)
			㉓ 白磁 碗	— 14Cごろ	実測図は小破片の為、省略

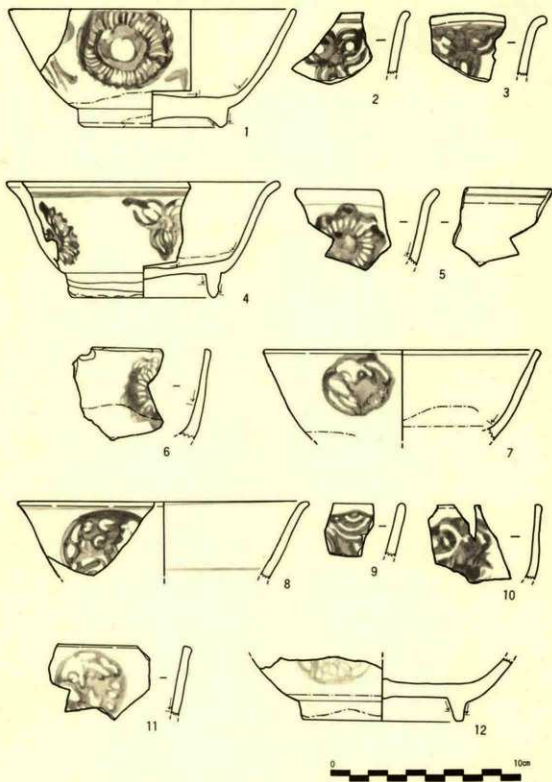


第5図 (図版-2) 染 付

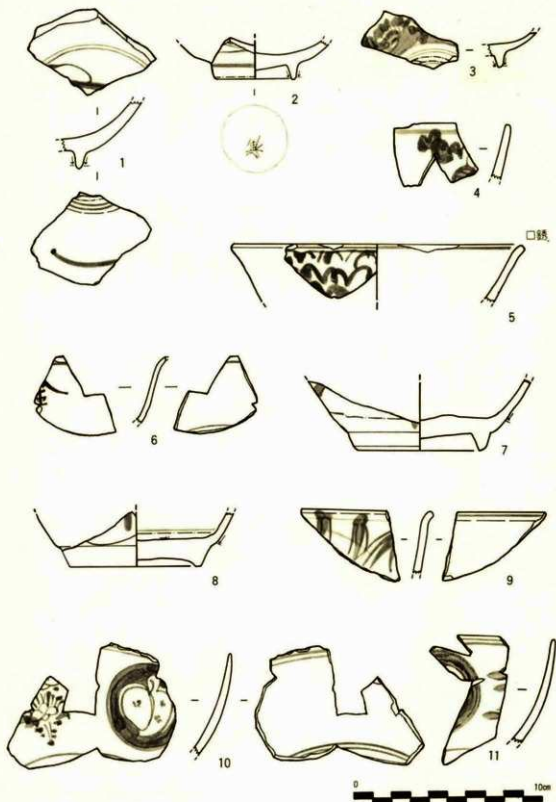
第3表 一第5・6図に対応する分類表一

器種	年代	備考
① 青花碗	中国 16C～17C前半	焼成不良
② *	中国 15C後半～16C前半	腰の部分無葉文
③ *	* *	*
④ *	* *	*
⑤ *	* 16C～17C	
⑥ *	* 16C	
⑦ *	* 16C	
⑧ *	* 16C末～17C前半	花鳥文
⑨ *	* 15C後半～16C中葉	
⑩ *	中国 17C中葉ごろ	百寿文(鹿児島県上浜採集品にあり)
⑪	肥前 17C後半	
⑫	* *	
⑬	* *	
⑭	* *	
⑮	* *	
⑯	肥前 *	雲龍見込瓦文様
①～⑫ 青花碗	中国 17C後半～18C	印刷手

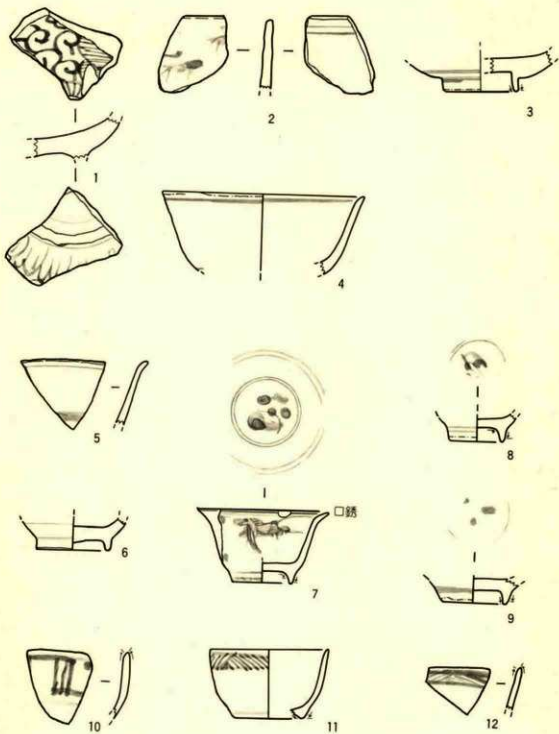
磁器 染付 碗



第6図 (図版-3) 染 付 (印判手)



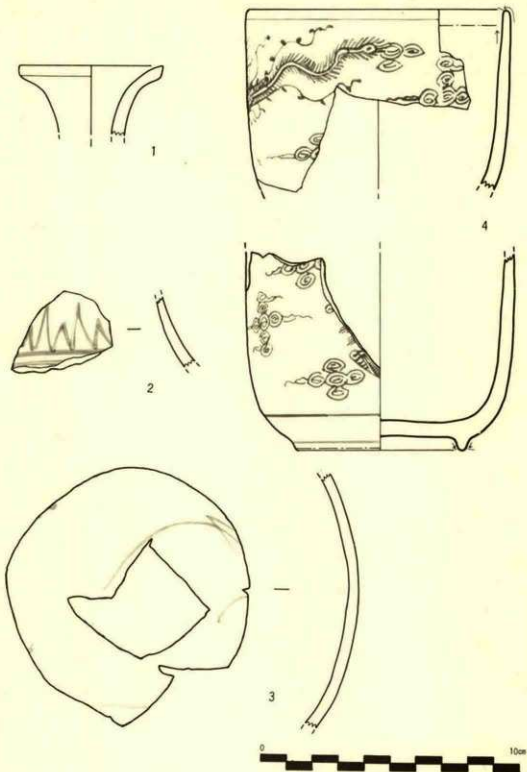
第7図 (図版-4) 染 付



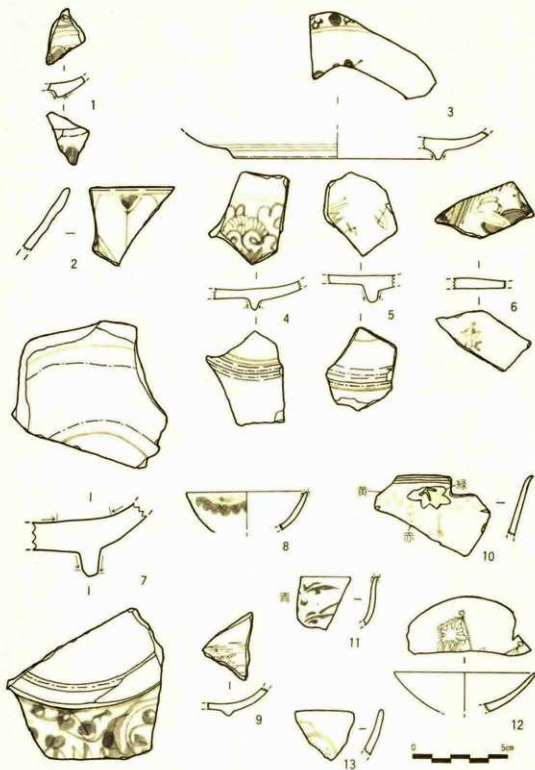
第8図 (図版-5) 染付

第4表 第7・8図に対応する分類表

器種		年代		備考
磁器	碗	①	肥 前 17C後半	外面雲龍文 見込共線文
		②		高台内「製」字
		③	肥 前 17C末～18C前半	
		④ 青花碗	中 国 17C後半～18C	印刷手を意匠と思われるもの
		⑤		口縁
		⑥		外面文字を染付
		⑦		内底に重ね積みによる細線あり 福建、広東
		⑧		
		⑨		17C後半～18C前半
		⑩		18C～19C前半
		⑪		
小坏	碗	① 青花碗	中 国 18C～19C	
		②	肥 前 1750年～1810年代	差別碗 茶飲用 雲持部
		③	瀬戸・美濃系 明治～大正	
		④		
		⑤	肥 前 17C後半	
		⑥		高台裏付に形付者
		⑦ 青花小坏	中 国 17C後半～18C	口縁
		⑧		
		⑨		
		⑩ 青花小坏	中 国 17C後半～18C	福建か?
		⑪		
		⑫ 青花小坏	中 国 17C後半～18C	口縁無縁 釉薬が充分溶けてない



第9図 (図版-5) 染 付

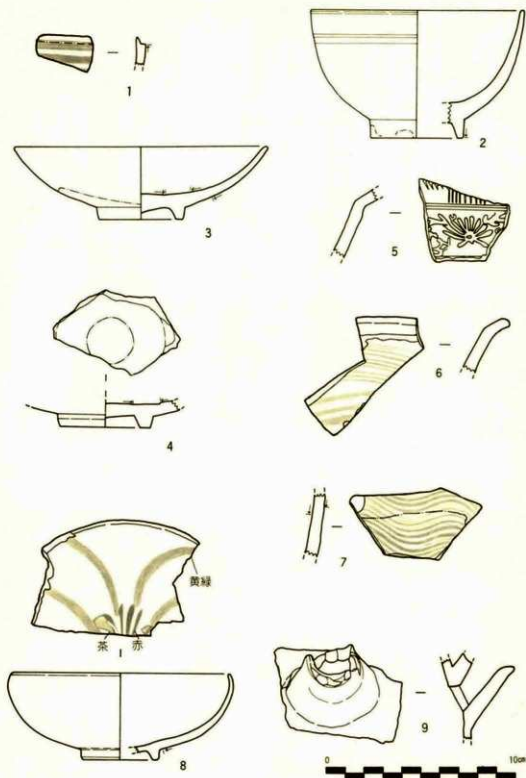


第10図 (図版-6) 染付・色絵・釉下彩

第5表 第9・10図に対応する分類表

		器種	年代	備考
磁器	染付	瓶	① 肥 前 17C後半	
			② — — — — —	
			③ 肥 前 17C後半	
		蓋物	④ 中 国 17C～19C	口縁部無軸、鳳凰に雲文
			① 中 国 15C後半～16C中	幕型底
			② 肥 前 17C中葉	内面矢羽模文
	皿	皿	③ 17C末～18C初	唐草文
			④ 中 国 17C後半～19前半	
			⑤ — — — — —	⑤ 唐中、底を見込に染付したもの
			⑥ — — — — —	
		器種不明	⑦ 中 国 17C後半～19C前半	鉢か?
			⑧ 肥 前 系 18C末～19C	染付仏器器か?
			⑨ 瀬戸・美濃系 昭和	ゴム印、型成形、皿か?
	色絵	碗	⑩ 肥 前 1650年～70年	上絵でブドウ文を描く (赤、緑、黄など)
			⑪ 中 国 18C～19C	福建か、型成形
		小杯	⑫ 瀬戸・美濃系 明治以降	
	釉下彩	碗か小杯	⑬ 瀬戸・美濃系 明治末～大正	刷脂転写、古銭文

※釉下彩とは→コバルト(呉須)の含量による釉下彩を染付と呼ぶがそれ以外のクロムなどの含量によって彩色したものを釉彩下彩と称し区別する。



第11图 (图版-7) 陶器

第6表 一第11図に対応する分類表一

器種	年代	備考
鉄 絵 蓋物 ①	タ イ 16Cごろか	
鉄 釉 碗 ②	唐津系 17C後半～18C前半	焼成不十分
青 緑 釉 皿 ③	唐津系	見込に藍ノ目鉢八半部分に彩目鉢4ヶ所 (協野町)内野山窯
銅 緑 釉 皿 ④	唐津系	見込に藍ノ目鉢八半 (協野町)内野山窯
陶 器 大 皿 ⑤	唐 津 17C後半～18C前半	濃淡手法により文様を印刷し、白土を埋め込む(雲文帯、菊唐草文)
器種不明	⑥ 唐津系 17C～18C	二彩(朝日、菊彩)
	⑦	
色 絵 皿 ⑧	京焼系 18C～19C前半	
土 瓶 ⑨	関 本 18C～19C	小代焼か?(肥手用の耳付)

(2) 沖縄製陶器

上焼(施釉)と荒焼(無釉)の2種があるが、碗、壺、鉢、蓋物、擂鉢等について図ごとに特徴を述べていく。

碗(第12図)

①は鉄絵碗である。高台部は無釉。②は素地、灰色を呈し、古我知焼と思われる。④は鉄釉を施釉したものである。内面は見込に重ね焼きのためリング状に釉ハギを行っている。⑪は面取りを施す小碗である。内底面見込み部に重ね積みによる熔着痕がある。⑩は釉呉須絵碗である。コバルトの発色で濃淡がある。

壺・鉢・蓋物(第13図)

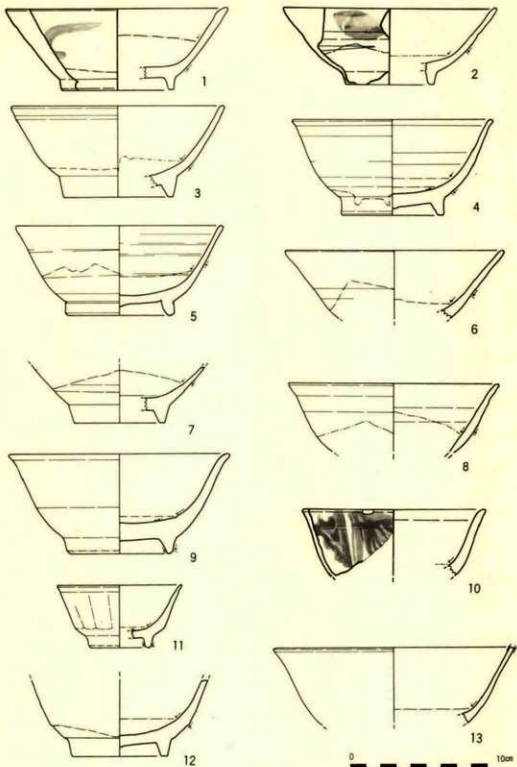
①、③は外面施釉、内面と高台部無釉である。②は、内外面とも施釉する。④、⑤は無釉の蓋と、水注の注ぎ口。⑥、⑦は鉢で、外面施釉、内面は無釉。なお⑥は碁笥底。⑧は鉄釉の蓋。⑨は外面のみ施釉。

鉢・擂鉢(第14図)

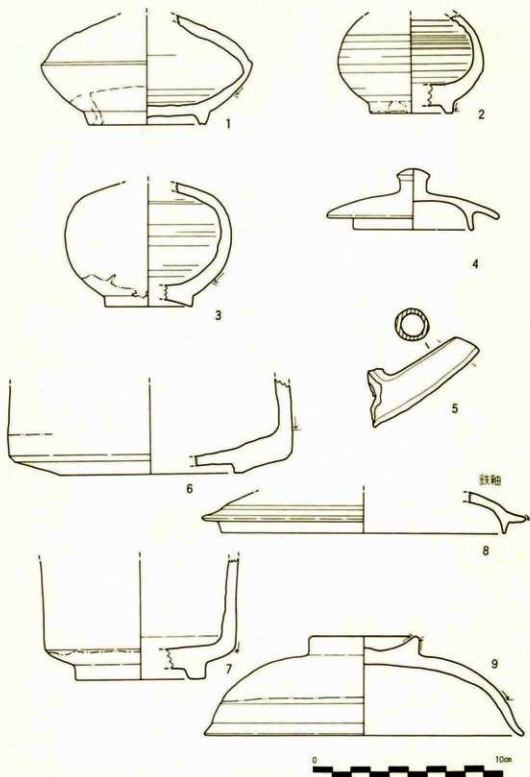
①は無釉、②は内外とも施釉し、口唇部のみ無釉である。③は還元焰焼成による無釉焼き締めである。④は高台を有し素地は灰白色。⑤、⑥は平底で酸化焰焼成。器壁も厚く重量がある。

その他(第15図)

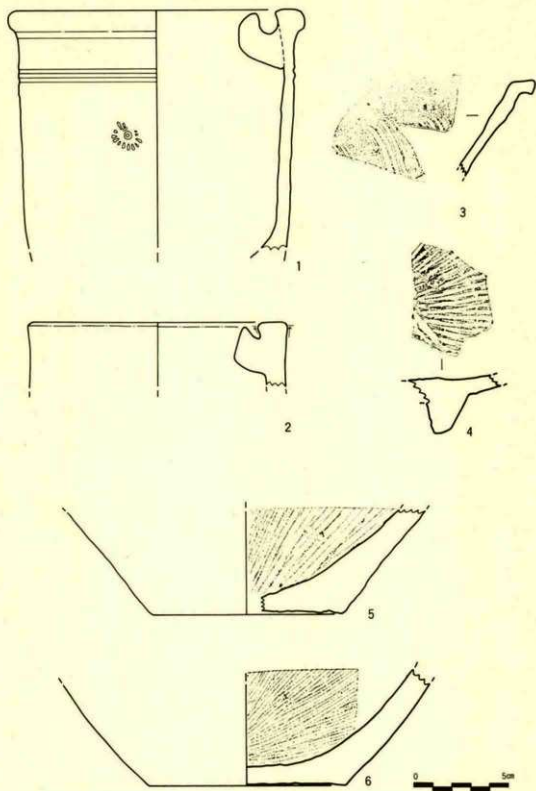
①は無釉の壺で、頸部に浅い凹線を一条巡らし、肩部に同じく凹線を二条巡らし区画線を施したり、中に記号を描いている。②、③は鍋で蓋付と思われる。口縁部内面は無釉。④、⑤は還元焰焼成による無釉焼き締めである。⑥は内面に磨削りの調整痕をとどめる。⑦はワンプー(練鉢)である。



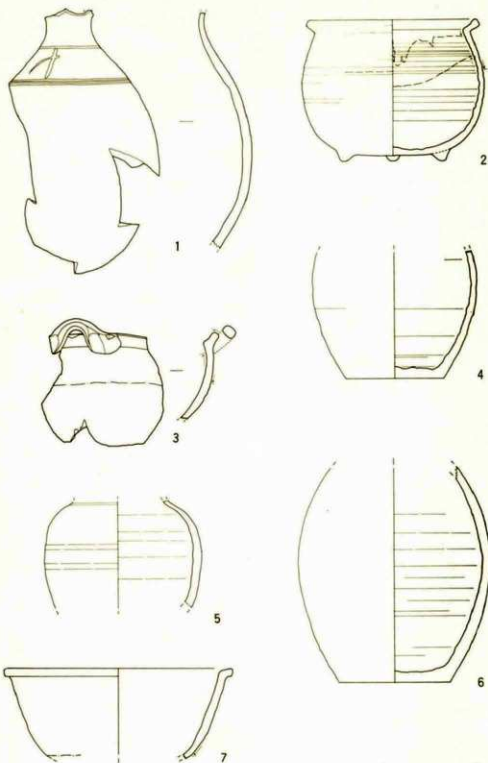
第12図 (図版-8) 沖縄製陶器



第13図 (図版-9) 沖縄製陶器



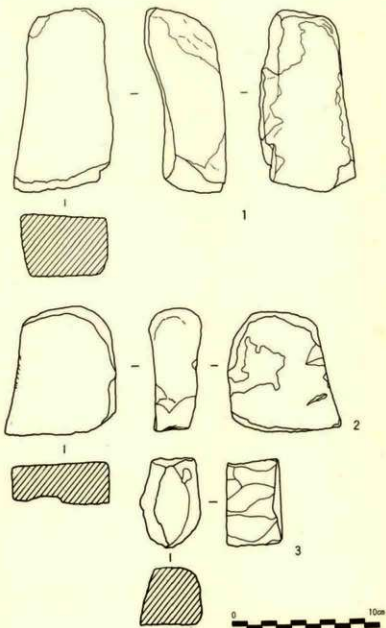
第14図 (図版-10) 沖縄製陶器



第15図 (図版-11) 沖縄製陶器

(3) 砥石 (第16図)

3個検出されたが、①は二面が砥面として使用されている。湾曲する程、利用されている。②は四面とも砥面として使用され、厚みが2.2cmになるまで磨滅している。③は砥面の粒子が最も細かく手触りがつややか。

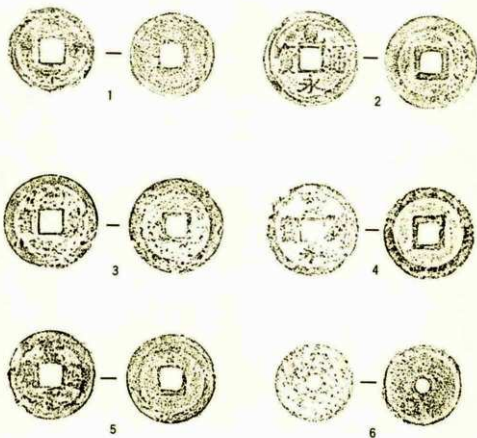


第16図 (図版-12) 砥石

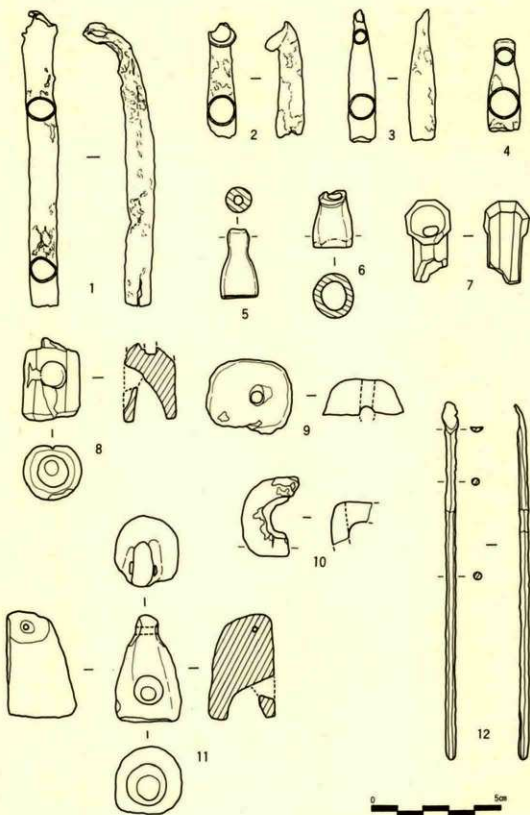
(4) 古銭・キセル・ジーファー (第17・18図)

古銭は全部で7枚得られた。6枚は寛永通宝であるが、1個については文字不祥で判読が難しい。

①～④は金属製のキセルと吸口である。⑤～⑦は陶製の吸口とパイプである。⑧～⑪は石でつくられたキセルの雁首である。⑫はジーファー。



第17図 (図版-12) 古 銭



第18図 (図版-13) キセル・ジーファー

Ⅲ．調査の成果と課題

発掘調査の目的については、前章でも述べたように土地改良工事に伴う範囲確認調査である。田井等遺跡の分布する範囲は盛土工法を採用するということで保護策はとられたが、10数メートルの高さで盛土が行なわれるため、余程のことがないがぎり、再び掘り起こされることはないであろうと思われる。

今回の調査で遺物が得られたのはⅣ地区が主体であった。立地については、当初、ハニ、タタキ神の宮のすぐ下の小高いサトウキビ畑あたりが、保存はいいのではないかと思われたが、試掘の結果、むしろ遺跡の中心はⅣ地区のような低地のほうにあったと考えられる。

層序については、地山まで含めて3枚の層からなるが、包含層であるⅠ層もキビ畑の切り返しのときに攪乱を受けていた。

出土遺物は、中国製磁器と本土製陶磁器、沖縄製陶器などである。中国磁器は、14世紀から19世紀にかけての資料が得られた。量的には、14世紀～16世紀、17世紀～18世紀の二時期のものが多い。

本土製の陶磁器については、17世紀後半から19世紀前半にかけての遺物が出土したが、17～18世紀が主体である。

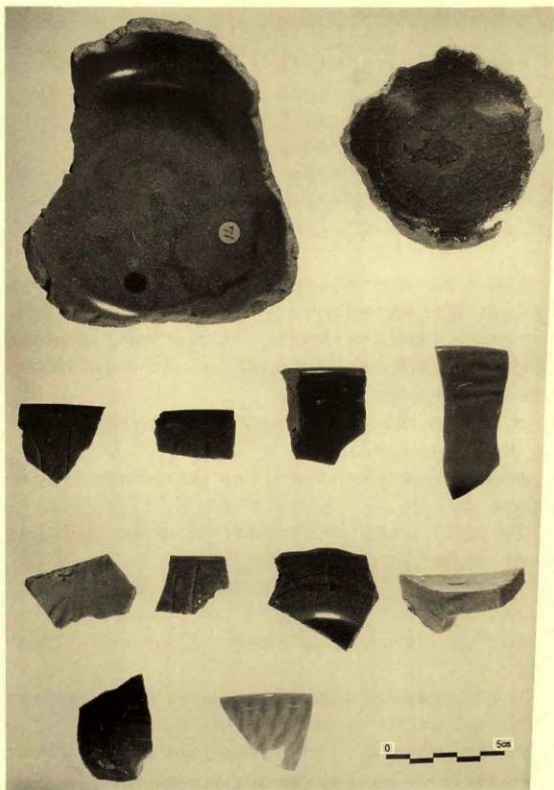
表面調査では、少量の土器片が採集されているが、今回の発掘調査では土器は検出されなかった。

編年の位置づけは、陶磁器の年代から判断するとグスク時代後期から近世にかけての遺跡と考えられる。

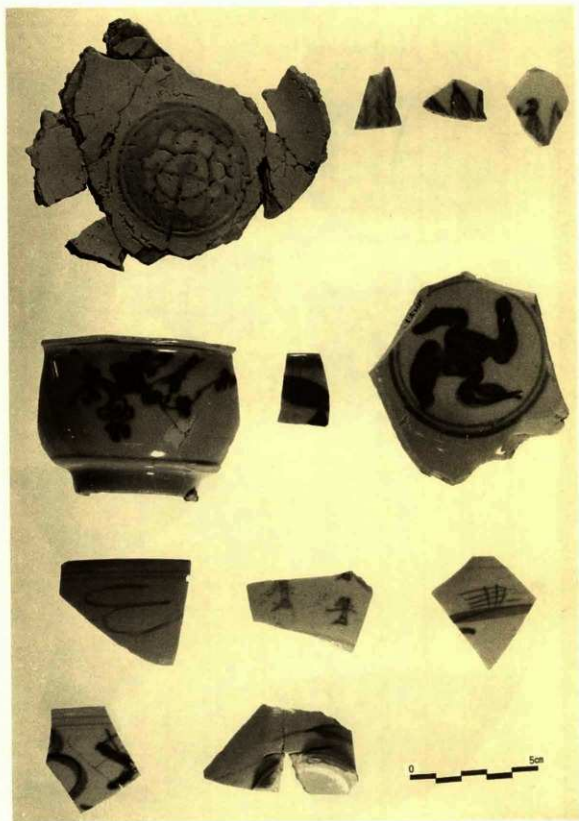
今回、Ⅲ地区などは、十分な調査ができず、田井等遺跡の全体を明らかにすることはできなかった。

遺構については、保存状態が悪く何一つ明らかにすることができなかったことは、残念である。

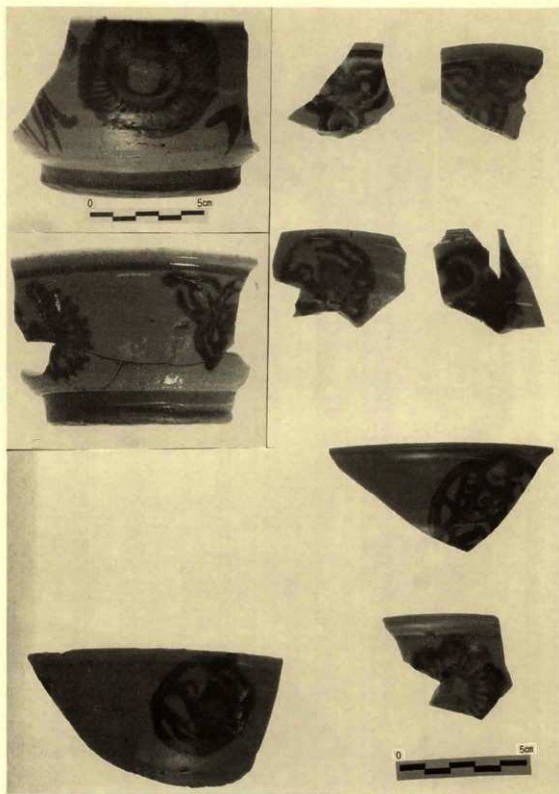
これまで田井等遺跡が田井等部落の古村であると伝えられてきたが、今回の調査で該期のムラの存在を立証する資料が得られたことは、一つの成果である。そして、いつ田井等のムラが発生し、いつ現在のようになつたのかを検討するのは、今後これらの遺物とのつき合せの中で作業が進められていくだろう。



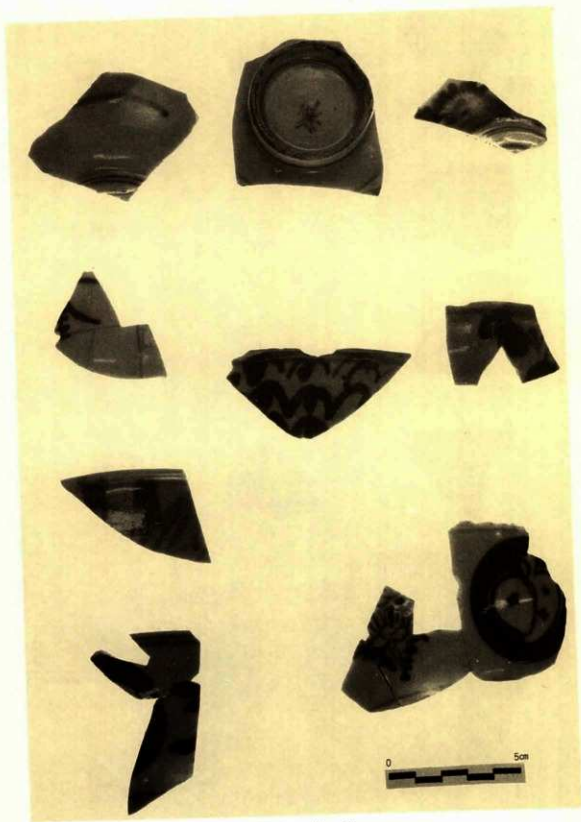
图版-1 青磁



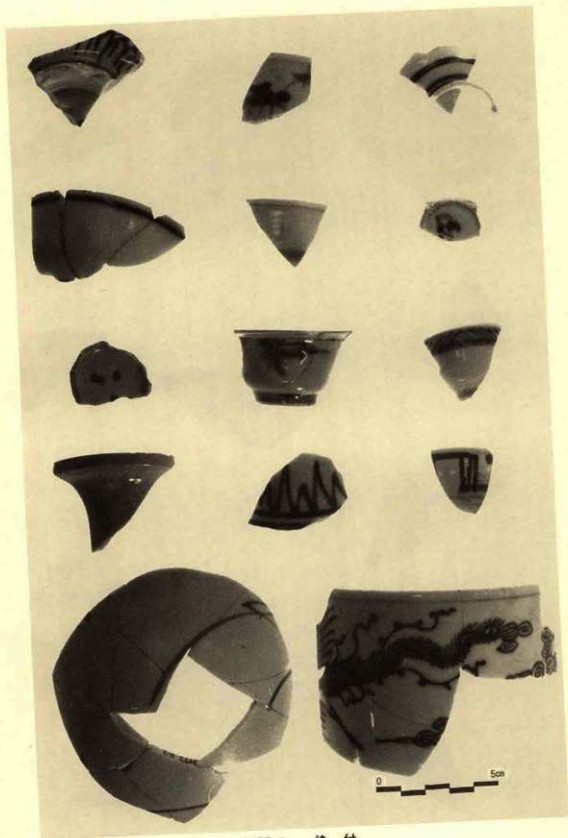
図版-2 染付



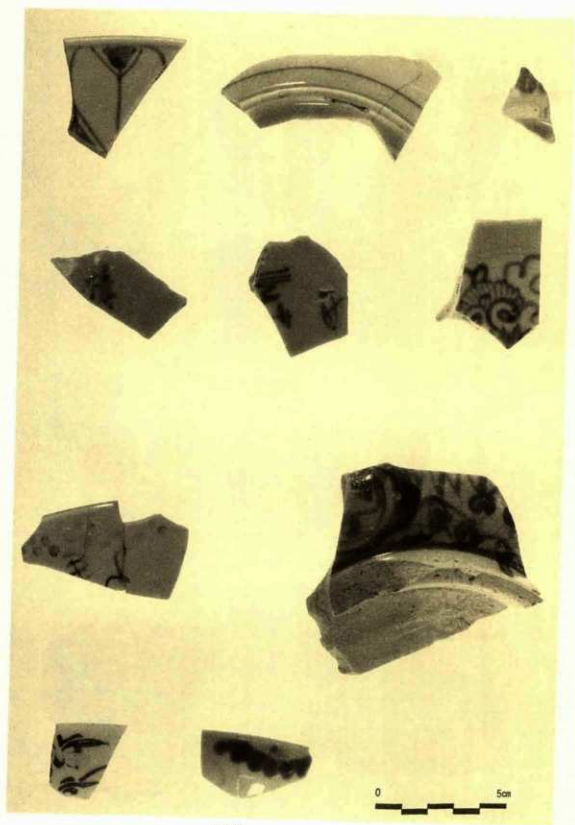
図版-3 染付（印判手）



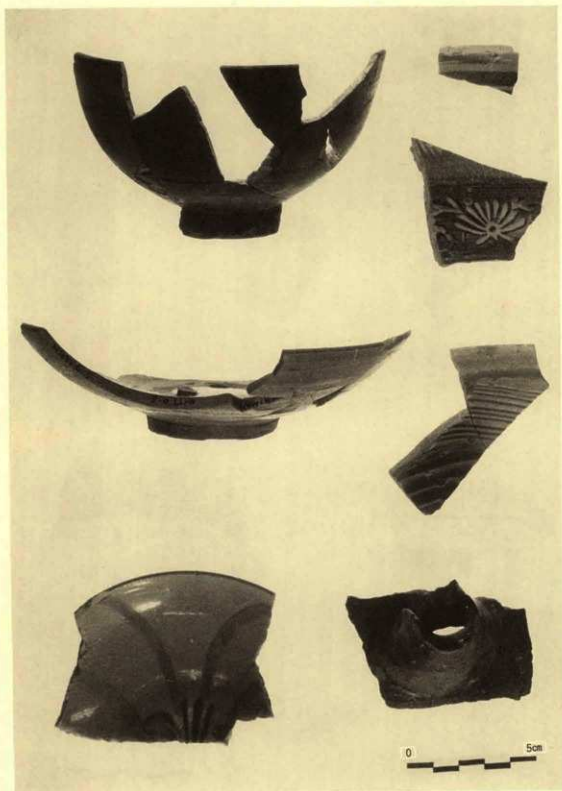
圖版-4 染 付



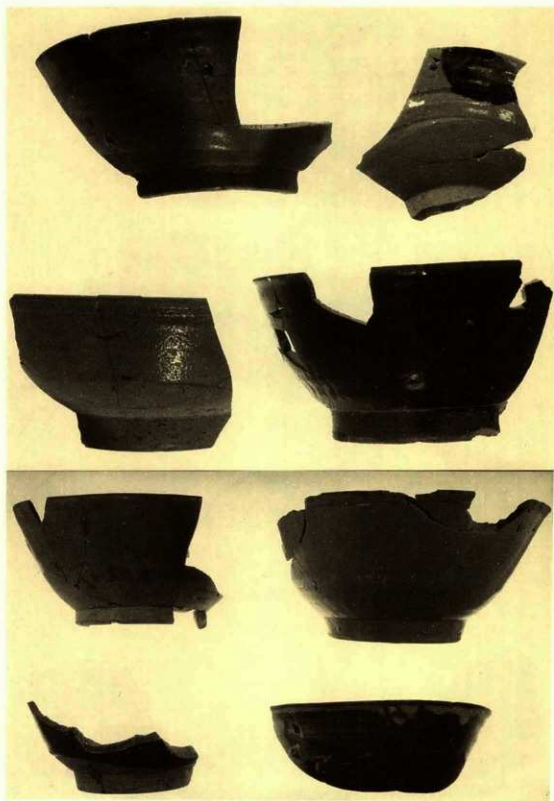
图版-5 染 付



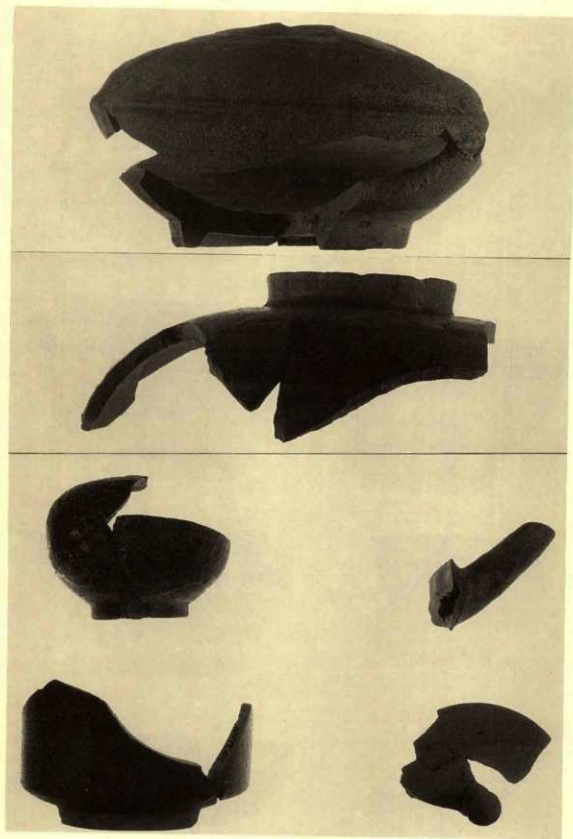
図版-6 染付



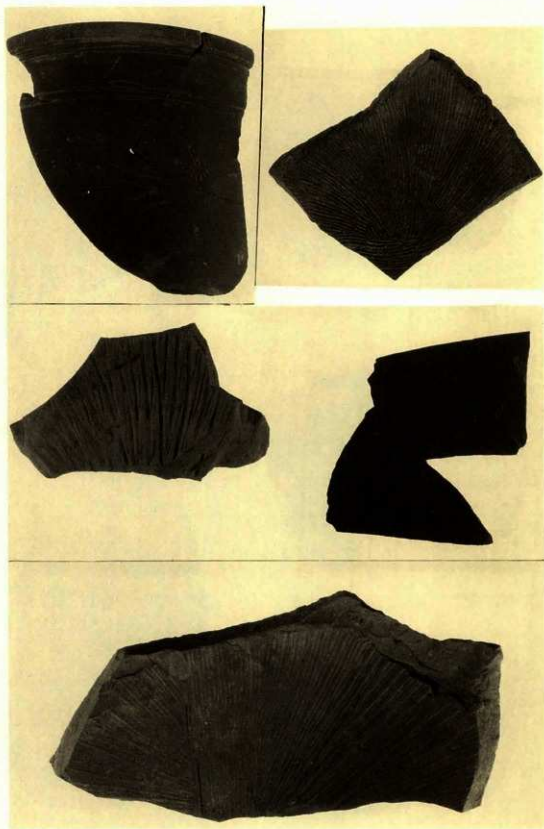
図版-7 輸入陶器



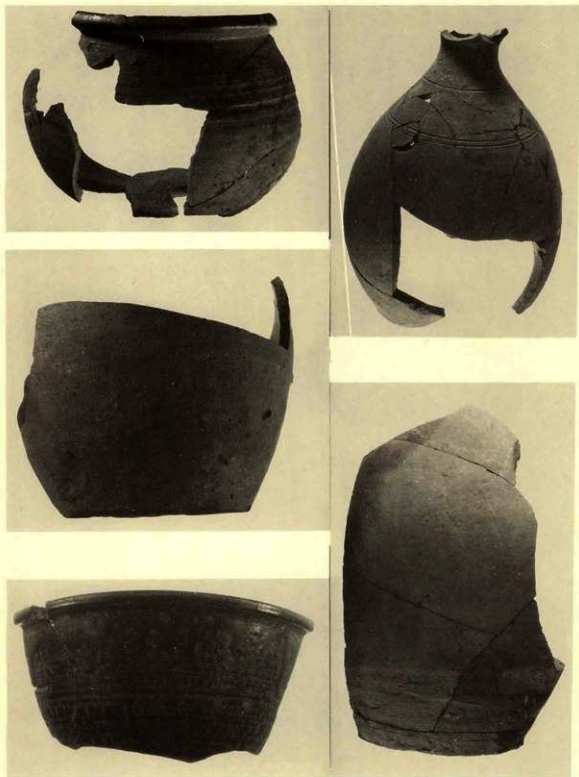
図版-8 沖縄製陶器



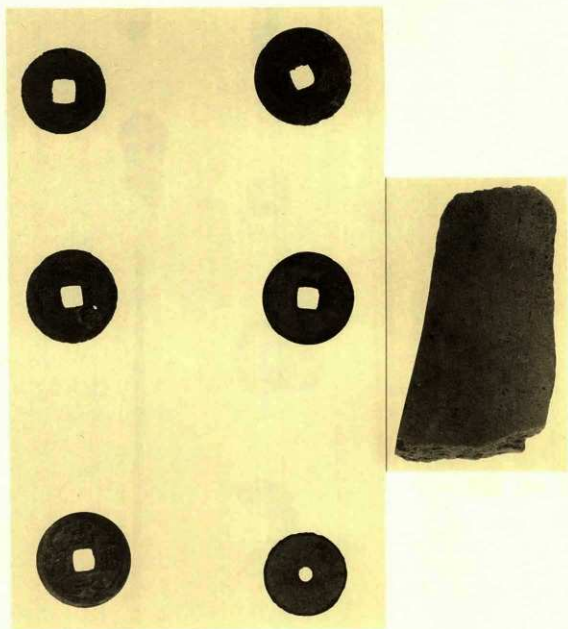
図版-9 沖縄製陶器



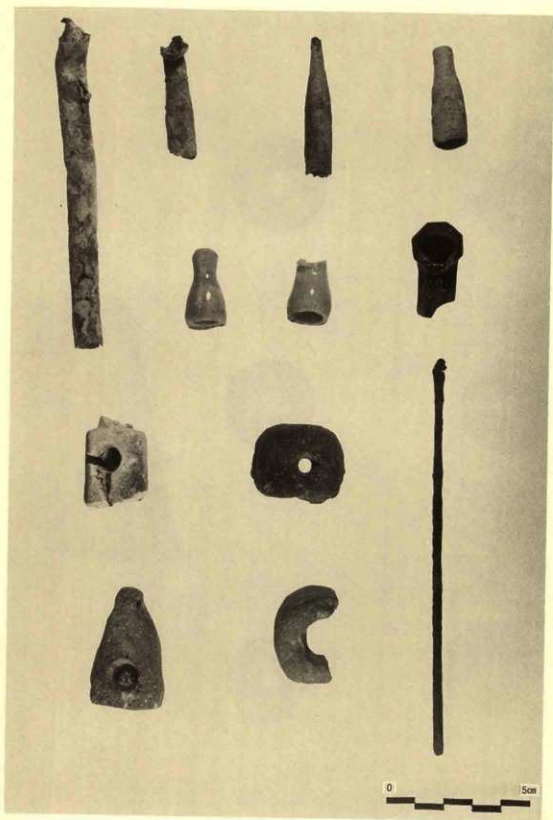
図版-10 沖縄製陶器



図版-11 沖縄製陶器



図版-12 砥石・古銭



図版-13 キセル・その他

羽地間切番所跡遺跡

I. 羽地間切番所跡遺跡の位置と環境



神道を軸に、北の勘定納港から
(1)親川グシク→(2)御殿屋敷→羽地
周切番所→(3)神所屋敷→(4)アブハ
ミヌミヤ→(5)田井等アサギと分
布している。ここは、親川部落の
西側丘陵を形成し、緑地環境を残
しグスク時代～近世～近代の遺跡
が歴史環境を形づくっているところ
である。

以下、神道に連なる遺跡について述べる。

(1)親川グシクは、約50mにわたる野面積の石垣を有するグシクで13世紀ごろの中国青磁や、グスク土器が得られる。

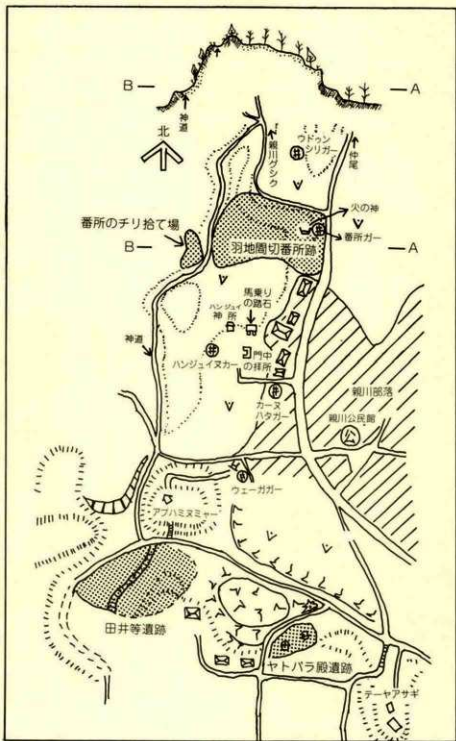
(2)羽地間切には、両惣地頭（御殿、殿内）がいたとされ、このうちの御殿屋敷のあったところとされる。敷地内に、ウドゥンシリガーと称される井戸も残っている。

(3) 殿内屋敷跡ではないかと考えられているのが神所である。ここには、ハンジュイヌカーやノロが馬に乗る踏台にしたと伝わる馬乗石（マーヌイシ）などがある。

(4) アブハミヌミヤは、田井等・親川の掛所である。

(5)田井等のアサギは、田井等の

重要な拝所である。



第2図 羽地間切番所跡遺跡の位置

Ⅱ．調査結果の詳細

1.発掘調査の範囲と方法

番所の遺構が残るかどうかの確認のため、敷地中央部に、東西、南北方向に試掘トレンチを入れ、層の観察を行なった。

この結果から、敷地中央部は、以前高台になっており、大きく削られ、低地の方へ埋土が行なわれていたことが明らかにされた。

元の地形が残っているのは、低地であったと思われる南側の道に面した周辺部が予想されたため、断面を切り観察してみると、そこから石垣の根石部分が発出された。これで、調査の中心は敷地の周辺部に移り、3 mにも及ぶ盛土の除去を行なった。

道と、石垣遺構の検出・上杉県令日誌^{※注1}や尾崎三良巡回日誌^{※注2}を手がかりに門の位置、グスク時代の層の確認を課題に調査を進めた。

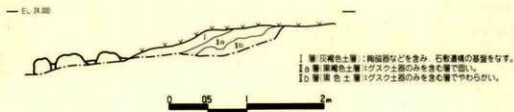
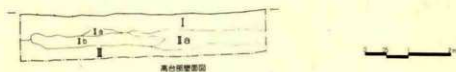
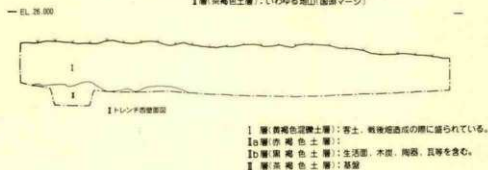
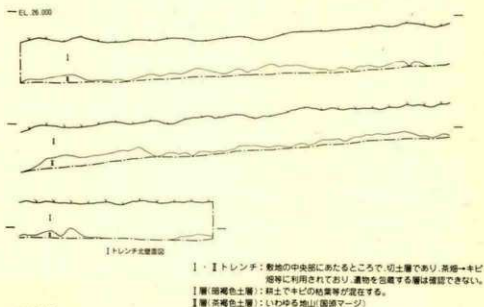


—遺構実測—

※注1) 第2代沖縄県令上杉茂憲が、在任中に県内各地を巡回視察したときの記録1880年(明治14年)

※注2) 尾崎三良日誌(明治15年)

第3図-1 土層断面図



第3図-2 III トレンチ西壁断面図

3. 遺 構

石垣遺構が姿を表わし、番所跡の保存を検討するきっかけとなった。階段状に三段あったことが確認された。

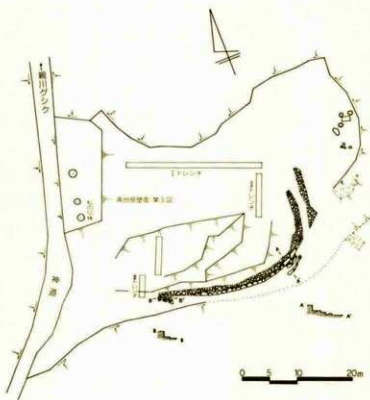
道についても、石垣遺構とともに確認された。門の位置については、上杉県令一行が巡回した時に次のように日誌に記している。

羽地番所は「門西ニ向ヒ、門柱ノ両^{ソウジヤウ}邊籐^{フジ}の生垣あり。仏桑花、三段花盛ニ開キ、庭梅花ヲ着ケ雪ヲ欺ク、東北ニ当リ、“オック”(ウスク)ノ大木アリ、五六百年ノモノナリ、其南北ハ医院分局ナリ、其東北青松雜木ニ囲マル、^{イフスイ}幽邃ニシテ、^{ハナバ}体裁太ダ宜シ。医事モ漸次ニ開ケ、病客陸續来ルヨシ」とある。

また、尾崎三良日誌には、「番所ハ小丘上ニ掘リ、隅ニ偏リ一面門南ニ面ス」とあるが、今回の発掘調査で、番所の南側において、神道寄りに階段状に登口が検出できたが、いまのところこれ以外に門の位置として考えられる遺構はない。



石垣遺構



第4図 羽地間切番所跡遺構平面図

4. 遺物

遺物は土器(グスク期)、中国製磁器、日本製陶磁器、沖縄製陶器、金属製品、瓦、陶製人形、石製鍾、古銭などである。以下、各項について述べる。

(1) 土器

番所敷地内の石垣遺構の下にもぐり込むような形で、グスク時代の層が確認された。鉢形のミニチュア土器がほぼ完形で得られた。その他は、すべて小破片で全形を窺えるものはない。以下、図ごとに特徴を述べる。

(イ) 第5図(底部)

底部は、ほとんどが平底である。⑦は内器面に刷毛目調整痕を残す。⑧は、高台を有する土器で、注目される遺物である。内面にススが付着する。

(ロ) 第6図(口縁・胴部)

口縁部と胴部を示した。①は、フェンサ上層式と呼ばれる壺形土器で、口径は図上復元を試みた。胎土中に砂粒を混入し、内外面とも簾による調整が行なわれている。

内面には指頭圧痕も残す。器色は内外面とも茶褐色。焼成は良好。②は、ほぼ完形に近いミニチュア土器である。器面調整は雑、焼成は良好。④は、器面調整が粗雑で指ナデや指頭痕をとどめる。少量の鉋物片が混入する。⑥は、胎土中に砂粒を混入する。器色は淡灰褐色。⑧は、壺形土器の頸部と思われ、口唇部が欠落している。胎土に細砂を混入している。焼成は弱く脆弱である。⑨は、外面は黒褐色、内面は灰褐色である。指や簾などにより器面調整をしているが、仕上がりは雑である。⑪も砂粒を混入する。⑫は器壁が薄く3mm程しかない。胎土に粗い砂粒を含む。⑬は、焼成が良くかたい。器面調整は雑。⑭は、杓の圧痕が残る。⑯は胎土に細かい砂粒を含む。

(2) 輸入陶磁器

青磁、白磁、染付、色絵、ルリ釉、緑釉、釉下彩が得られた。中国産がほとんどで日本製は量的に少ない。各図ごとに対称表を作成し特徴を述べる。ここでは、表に盛り込むことのできなかった事項について記す。

(イ) 第7図(青磁碗)

①は素地、灰白色。高台畳付のみ無釉。③は素地灰色。高台部無釉にするが、雑な

施釉のため畳付に流れ込んでいる。釉色は、明緑色。④は素地、暗灰色。高台内蛇ノ目釉ハギ。⑤は素地、灰色。高台無釉。釉色は淡青色だが、焼成不十分のため完全に溶けてない。⑥・⑬は素地、灰色～灰白色。高台内蛇ノ目釉ハギ。⑧は素地、灰白色。高台内無釉。⑪は、高台無釉。釉色は淡青色で透明度高く薄い。

(ロ) 第8図(青磁碗)

①は素地、灰白色。高台内蛇ノ目状に釉ハギ、この部分に窯道具の熔着痕あり。
②は素地、灰色。高台無釉。⑤は素地、灰色。高台内底無釉、窯道具の熔着痕あり。
⑦は高台内蛇ノ目釉ハギ。釉色は緑褐色で焼成不十分。

(ハ) 第9図(青磁、碗・小坏・小鉢)

①は釉色、灰緑色であるが十分溶けていない。②は素地、淡褐色で焼成不十分。④は、外面青磁釉。内面透明釉。口唇部に鉄を塗っている。⑤は、外面青磁釉。内面透明釉。口唇部に口紅。⑧は素地、白色。高台畳付のみ無釉。高台内のみ透明釉。⑫は高台畳付のみ無釉。⑭は、高台無釉。

(ニ) 第10図(青磁、小鉢・瓶・皿・盤)

①は素地、灰白色。高台内蛇ノ目状に釉ハギ、釉ハギ部分に窯道具の熔着痕あり。
②は、高台内見込とも無釉。⑤は、全形が窺えるものである。素地は灰白色。高台内部のみ無釉、露胎部に窯道具の熔着痕あり。

(ホ) 第11図(白磁、碗・小坏・皿)

④は素地、灰白色。高台無釉。釉色は灰青色を帯びる。⑤は口唇部無釉。⑬は素地、白色。透明釉、釉色は青味を帯びる。

(ヘ) 第12図(染付碗)

⑧・⑬は、素地、白色。高台畳付のみ無釉。釉色は青味あり。

(ト) 第13図(染付碗)

④・⑤は、高台畳付と内底は蛇ノ目釉ハギ。⑦は素地、白色～灰白色。高台畳付無釉。⑫は素地、白色。外面、青磁釉。内面透明釉。

(チ) 第15図(染付、小坏・鉢・蓋物・皿)

①・③・⑩は素地、白色。高台畳付のみ無釉。⑪は高台内無釉。⑫は底部無釉。

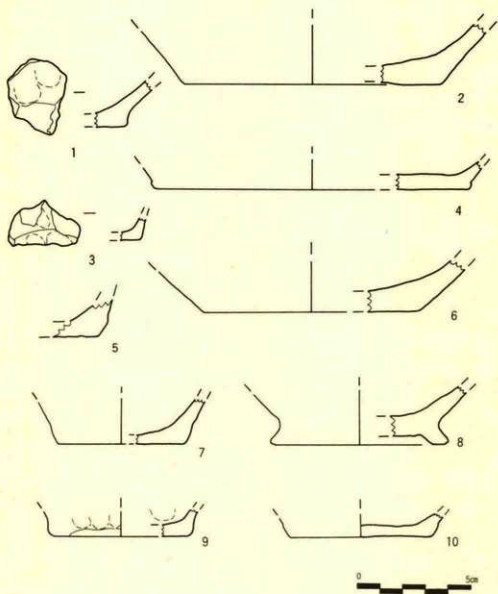
(リ) 第17図(色絵、ルリ釉)

①、②は素地、白色。口唇部のみ無釉(覆焼)。外面、ルリ釉。内面、透明釉。③は口唇部と高台畳付無釉(合せ口にして焼いたか)。⑨は、口唇部無釉。釉が十分溶けて

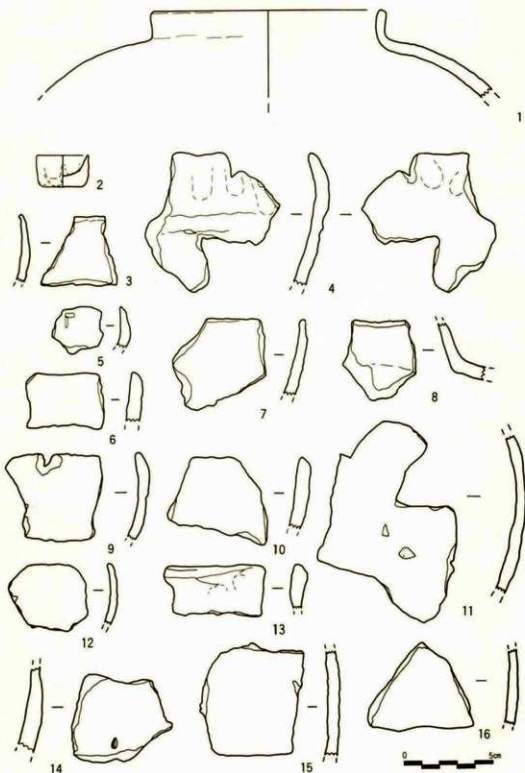
ない。⑫は素地、白色。口唇部のみ無釉(覆焼)。外面ルリ釉。内面透明釉。

(又) 第18図(緑釉、釉下彩、その他)

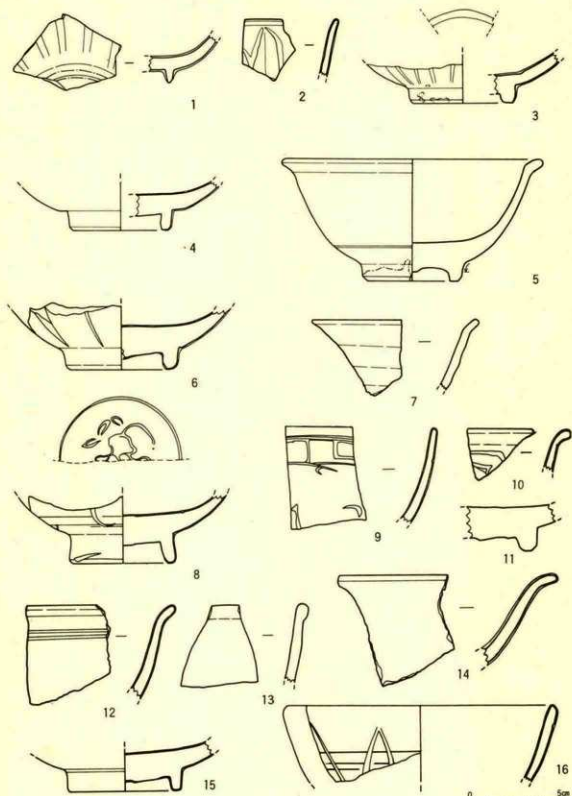
①、②は素地、白色。高台置付のみ無釉。釉色は青緑。



第5図(図版-1) 土 器 (底部)



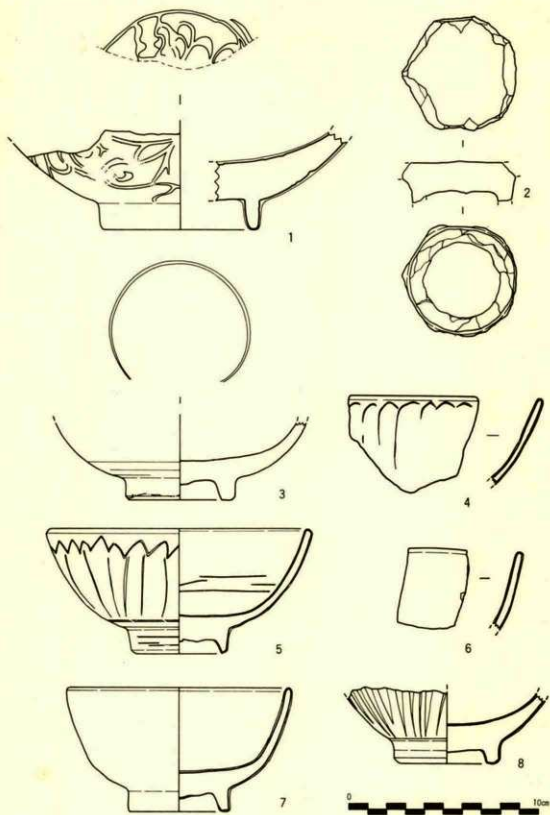
第6図 (図版-1) 土器



第7图 (图版-2) 青磁

第1表 一第7図に対応する分類表一

器種	年代	備考
①	中国 13C後半～14C中葉	外面、綫蓮井文
②	○	
③	○	
④	14C末～15C前半	
⑤	14C後半～15C中葉	見込に印花文
⑥	14C後半～15C前半	外面へう掻き蓮井文（幅の広い蓮井を施す、見込に印花文
磁器 青磁 碗	⑦	○ 粗製、□縁部焼反り
⑧	14C末～15C中葉	外面側面にうま式蓮井文の崩れた文様をへう掻き
⑨	○	外面□縁部に雷文等をへう掻き
⑩	14C後半～15C前半	外面へう掻き文、□縁部焼反り
⑪	○	粗製
⑫	○	□縁部焼反りに作られたもの
⑬	○	
⑭	14C後半～15C前半	
⑮	14C後半～15C中葉	
⑯	中国 14C後半～15C前半	外面にへう掻き蓮井文

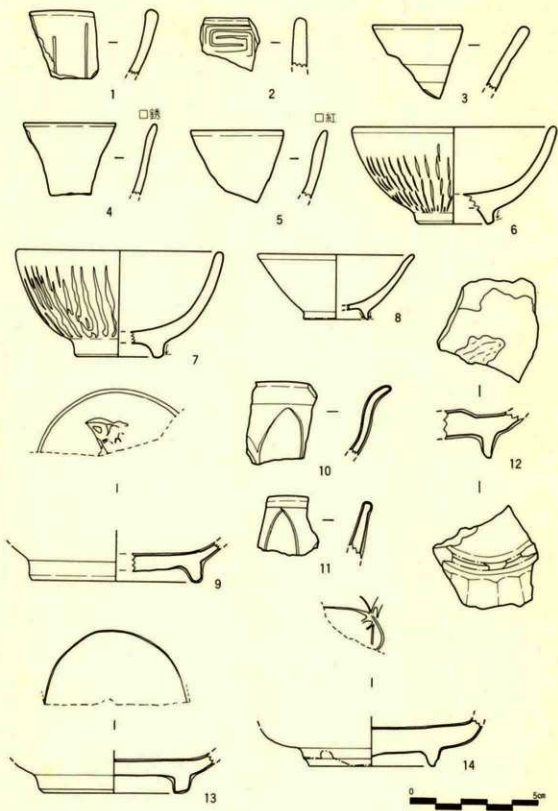


第8圖 (圖版-2) 青磁

第2表 一第8図に対応する分類表一

器種	年代	備考
①	中国 14C末～15C	内外面と見込へラ描き文
②	○	遊器として再利用か?
③	○ 14C末～15C	
④	○ 15C中葉～16C前半	外面刺先蓮弁文をへラ描き
⑤	○	
⑥	○ 15C～16C前半	
⑦	○	
⑧	中国 15C中葉～16C前半	外面刺先蓮弁文をへラ描き

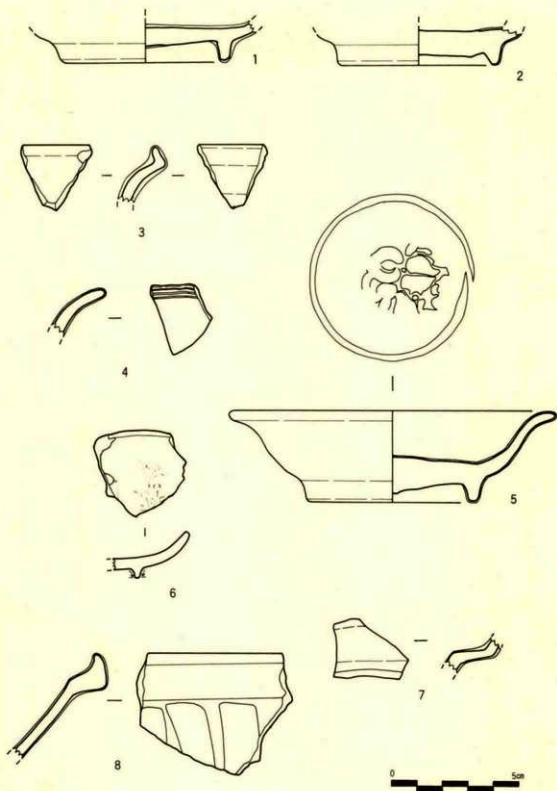
磁器 青磁 碗



第9図 (図版-3) 青磁

第3表 一第9図に対応する分類表一

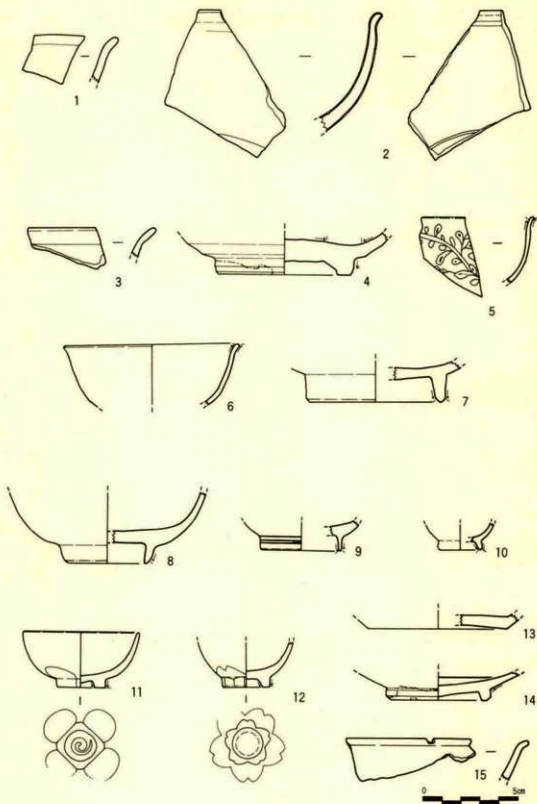
器種		年代		備考
磁器	青磁	①	中国 15C後半～16C中葉	刷先蓮井文の崩れたものをへう描き(組製)
		②	＊	口縁部に雷文等を印花
		③	＊ 明 15C～17C	
		④	中国が 18C～19C	口縁
		⑤ 小碗	肥前系? 19C	口唇部に口紅
		⑥ クロム青磁	瀬戸系 明治～大正	外面飛鶴の雕刻文を施こす
		⑦	＊	
	小坪	⑧	＊ 瀬戸系 明治～大正	
	小鉢	⑨	中国 14C	外面へう描き蓮井文 見込・印花文
		⑩	＊	外面へう描き蓮井文
		⑪	＊	外面へう描き蓮井文
		⑫	中国 13C後半～14C中葉	外面鎮蓮井文 見込・双魚文を貼付
		⑬	＊ 14C後半～15C前半	見込・印花文が
		⑭	中国	見込・この破片は二次的火熱に あっている。見込・印花文



第10図 (図版-3) 青磁

第4表 一第10図に対応する分類表一

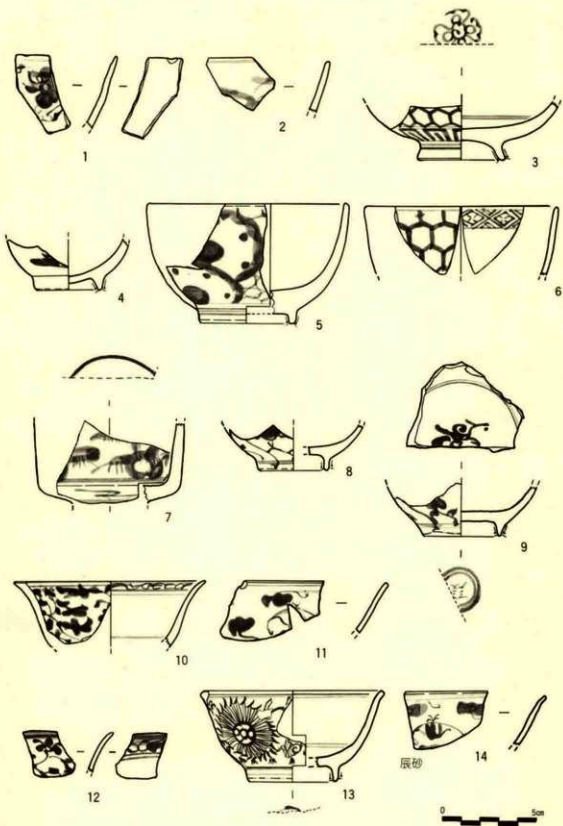
		器種		年代	備考
磁器	青磁	小鉢	①	中国 14C後半～15C前半	
			②	・	
	瓶	③	・	14C～15C前半	
			④	・ 15C	□ 腹部を種花形にカットしている □ 縁部内面に刺繍文を施す
	皿	⑤	中国	14C末～15C前半	見込に印花文（草花）
			⑥ クロム青磁小皿	瀬戸系 明治～大正	見込にクロムによる型紙模文様を施す（草花文か）
	盤	⑦	中国	13C後半～14C前半	内側面へう形りによる隣接文を表わす
			⑧	・ 14C後半～15C前半	内側面にへう形りによる隣接文の崩れたものを施したことがある



第11圖 (圖版-4) 白 磁

第5表 一第11図に対応する分類表一

器種		年代		備考
碗	①	中国	14Cごろ	
	②	・	・	見込・印花文か
	③	・	14C～15C	口縁部外反り
	④	・	・	
	⑤	・	18C～19C	福建産か 型成形により外面に陽刻文
	⑥	・	・	福建
	⑦	・	清(18C～19C)	
	⑧	・	・	
小杯	⑨	中国	清	
	⑩	・	・	
	⑪	瀬戸・美濃系	明治以降	
	⑫	・	・	
皿	⑬	中国	13C～14C中葉	
	⑭	・	16Cか?	見込・周囲に円鑲を施す
器種不明	⑮	平佐系か? 中国	19C?	

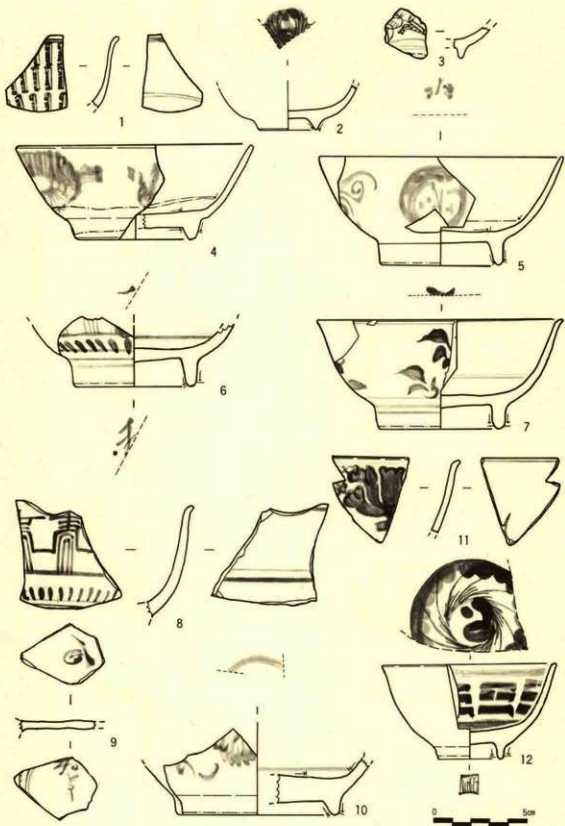


第12図 (図版-5) 染 付

第6表 —第12図に対応する分類表—

器種	年代	備考
① — 中国	16C~17C前半?	
② — 肥前	1660年~1680年	雲龍見込梵文様の口縁部
③ —	1760年~18C末	羽虫亀甲つなぎ文、腰部蓮井文 見込、花文
④ — 肥前系	18C~幕末	
⑤ — 肥前	18C	雲輪文
⑥ —	18C後半~1810年代	亀甲つなぎ文、口縁内面四方禪文
⑦ —	1770年~1810年代	筒形模(茶筒用) 外面竹文、腰部折松葉文
⑧ — 中国	18C~19C	仙芝祝寿文
⑨ —		
⑩ —		
⑪ —		外面つる草文が
⑫ —		外面花唐草文
⑬ —		外面唐花唐草文
⑭ — 中国	18C~19C	外面つる草文を染付と染付(割で 赤く着色させる)で描く

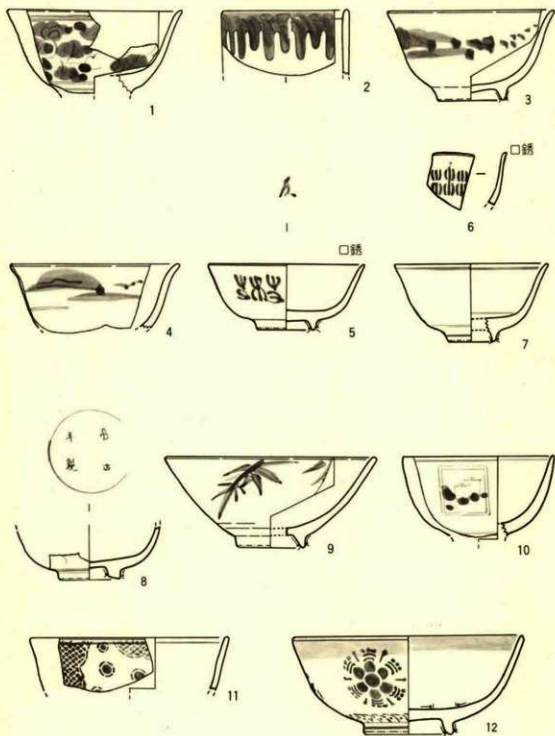
磁器 — 染付 — 碗



第13図 (図版-5) 染付

第7表 一第13図に対応する分類表一

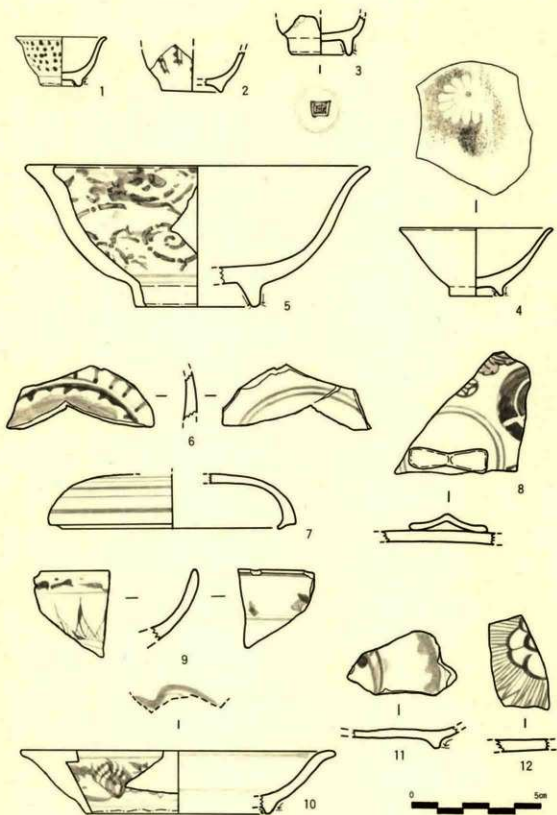
器 種	年 代	備 考
①	中 国 18C~19C	外面に梵字文
②	中国が	見込・花文を印花し、その上を ゴスで塗っている。
③	中 国	・
④	・	福建・広東産、外面・印利染付
⑤	・	福建・広東産
磁器 染付 碗	⑥	福建・広東産、高台内「和蘭」 外面・寿字文と菊花散し文
⑦	・	福建・広東産、外面花卉文
⑧	・	福建・広東産 外面・寿字文と菊花散し文
⑨	・	福建・広東産 高台内「和蘭」
⑩	・	福建・広東産
⑪	・	・
⑫	中国が 18C~19C	内外面・八卦文 高台内に一重方形枠内に雲形字



第14図 (図版-6) 染 付

第8表 —第14図に対応する分類表—

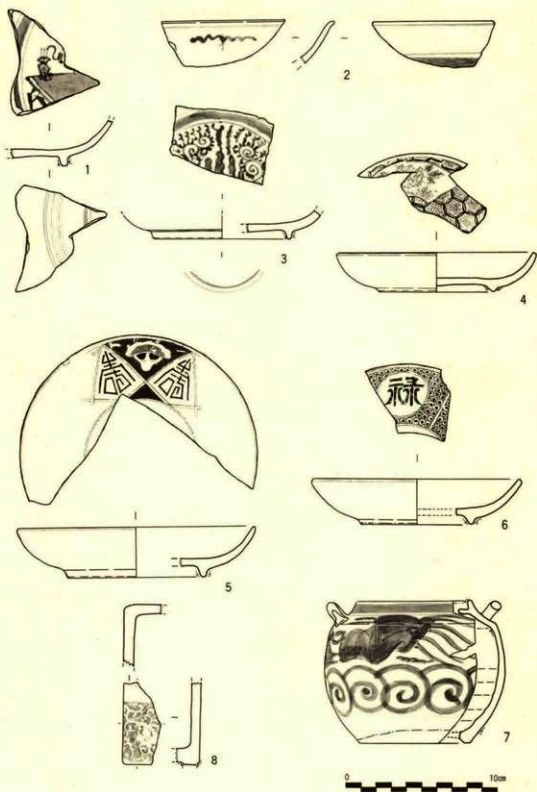
器種			年代	備考
磁器	染付	碗	①	肥前系 — 1810年～幕末 — 焼反碗
			②	肥前 — 1810年～幕末 — 茶数用
			③	平佐か — — — 焼反碗、山水文
			④	＊ — — — 少
			⑤	瀬戸系 — 19C後半～明治前半 — 口鉢
			⑥	＊ — — — 少
			⑦	国産 — 明治以降 — 銅板転写
			⑧	瀬戸・美濃系 — 明治 — 見込「明治年製」
			⑨	＊ — 明治以降 —
			⑩	＊ — 大正以降 — ゴム印版?
			⑪	九州 — 明治10年～大正 —
			⑫	九州 — 明治10年～大正 — 型紙産



第15図 (図版-6) 染 付

第9表 一第15図に対応する分類表一

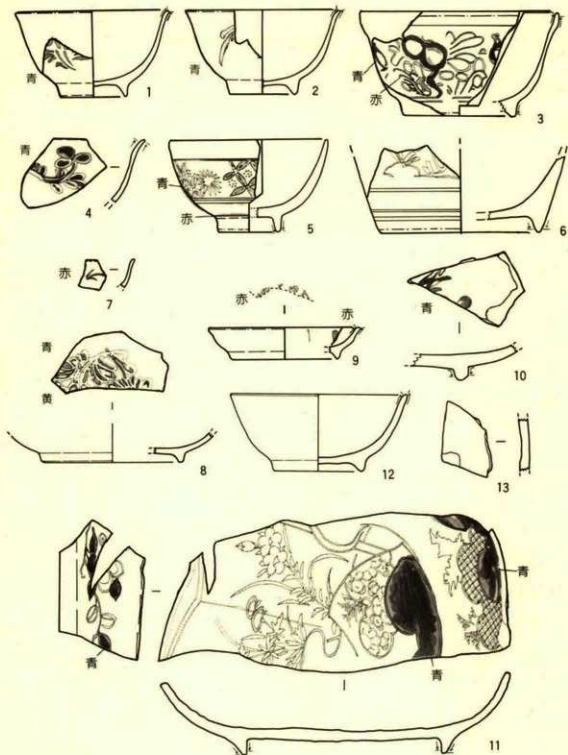
		器 種	年 代	備 考		
磁器	小杯	①	中 国	18C～19C	外面・花唐草文	
		②	*			福建省産が外面・梵字文・型成形
		③	*			外面に染付文様あり 高台内に二重方形枠内に堂形字を染付
		④	瀬戸・美濃系	明治以降		
	鉢	⑤	九 州	明治10年～大正	型成形、外面・唐草文 (スシカマイカイ)	
	蓋物	⑥	肥 前	1760年～18C末	蓋付碗の蓋と思われる 本文は亀甲つなぎ文、腰部には寿文	
		⑦	*	19C初～幕末		
		⑧	肥 前	*		
	皿	⑨	中 国	15C後半～16C中葉	底部は轆轤底になるタイプ	
		⑩	*			外面・牡丹唐草文 見込・玉取獅子文が
		⑪	*	18C～19C	福建・広東産が、型成形	
		⑫	中 国	18C後半～19C	福建・広東産	



第16図 (図版-7) 染 付

第10表 一第16図に対応する分類表一

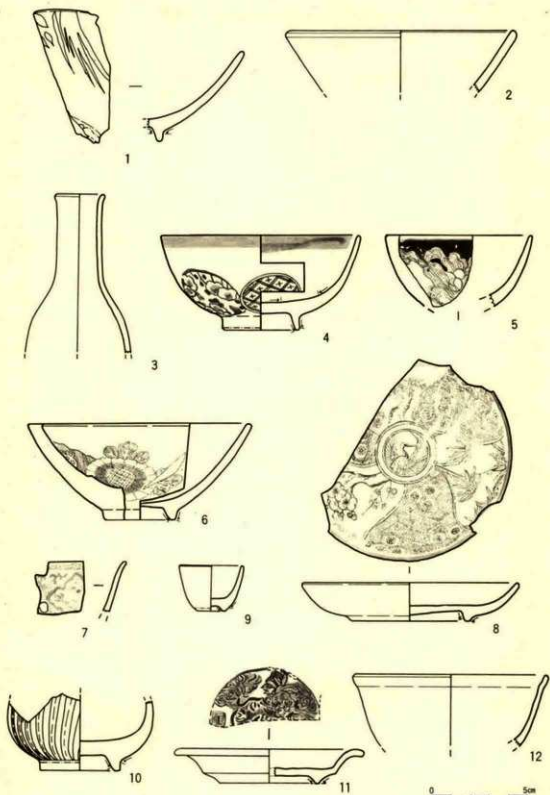
器種	年代	備考
磁器 染付	① 中国 18C~19C	
	② " "	
	③ 中国 18C~19C	
	④ 中国か 瀬戸・美濃系 19C	銅版転写、型成形
	⑤ 九州系 明治後半~大正	銅版転写
	⑥ " "	
瓶	⑦ 国産 明治以降	
器種不明	⑧ 瀬戸・美濃系 明治~大正	銅版転写



第17図 (図版-8) 色絵・ルリ釉

第11表 第17図に対応する分類表

器種		年代		備考
磁器	色絵	碗	①	中国 18C~19C 福建産か 青で上絵付、型成形
			②	“ “ “ “ “ “
			③	“ “ “ “ 福建産か 青・赤で上絵付、型成形
			④	“ “ “ “ 福建産か
			⑤	“ “ “ “ 国産か 明治以降 上絵付、赤青などで着色
	蓋物	坏	⑥	肥前か? 18C
			⑦	中国 18C~19C 赤で草文を上絵付
			⑧	中国 18C~19C 福建産か、 青・黄で上絵付、型成形
			⑨	“ “ “ “ 福建産か、 赤で上絵付、型成形
			⑩	平佐か 19C
			⑪	肥前 18C前半 上絵付(上手のもの)
	ルリ釉	碗	⑫	中国 18C~19C 福建産か、型成形
			⑬	中国 17C~19C

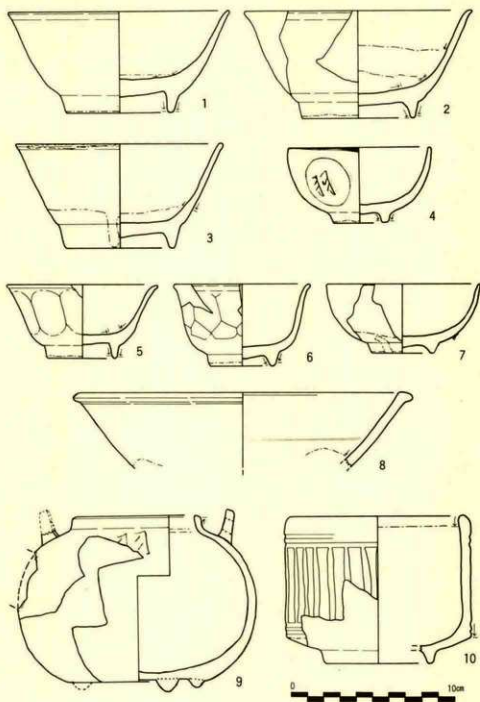


第18図 (図版-8) 緑釉・釉下彩・その他

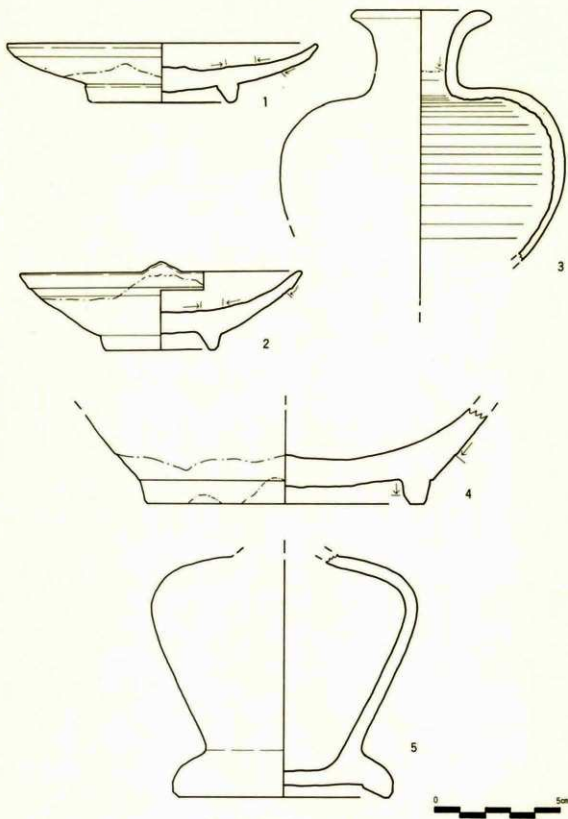
第12表 一第18図に対応する分類一

		器 種	年 代	備 考		
磁器	緑釉	碗	① 瀬戸系?	明治以降	上絵付あり、剥落している	
		碗	②			
		瓶	③ 国産	明治以降		
	釉下彩	碗	④ 九州系	明治後半～大正	剥落転写	
		碗	⑤ 瀬戸・美濃系	明治～大正		
		碗	⑥			
		小坏	⑦		剥落転写	
		皿	⑧		緑色はクロムによる発色	
	その他	⑨	中国ガ	18C～19C		
		⑩				
		⑪ 小皿	瀬戸・美濃系ガ	19C		
		⑫ 褐釉磁碗	国産	明治以降		

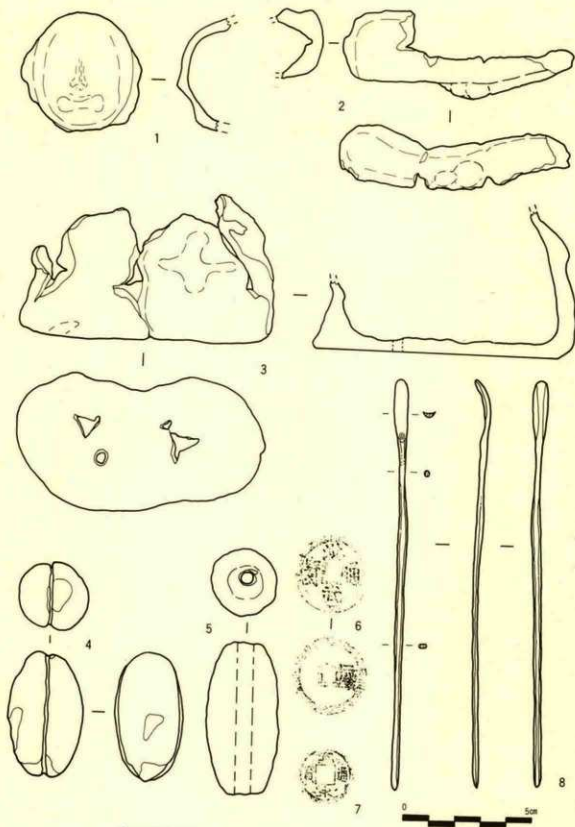
※釉下彩とは→コバルト(呉須)の含料による釉下彩を染付と呼ぶがそれ以外のクロムなどの含料によって彩色したものを釉下彩と称し区別する。



第19図 (図版-9) 沖縄製陶器



第20図 (図版-9) 沖縄製陶器



第21図(図版-10) その他(人形、錘、古銭、ジューパー)

(3) 沖縄製陶器

(イ) 第19図

①、②は一般に壺屋焼といわれている白釉碗である。③は、灰釉碗で釉薬は、薄い釉層で、淡緑色の灰釉をつけ掛けによって施釉する。④、⑨はともに「羽」の字が入り、特注品であろうか。⑤、⑥は、面取湯呑であるが前者は白釉で重ね積による溶着を防ぐためリング状に見込を釉ハギしている。後者は灰釉で、見込に溶着を防ぐため砂が付着している。⑧は、灰釉のワンプーである。⑩は鉄釉香炉であるが、外面に釘彫りによる凹線を施している。

(ロ) 第20図

①は灰釉の皿で、釉色は淡緑色である。見込に重ね焼きのため、リング状に釉ハギを行ない、砂が付着している。高台部は無釉。②は内面のみ白土化粧掛けを行なった後、白釉を施釉したものである。外面は無釉。高台畳付に重ね焼きによる溶着を防ぐための砂目が付着。③は鉄釉の瓶で、口縁部内側面から外面に施釉している。内面には、轆轤目を残す。④は黒釉の陶器で、一般的にアンタガミと称されているものの底部と思われる。内面は淡茶褐色を呈している。⑤は口縁部を欠失するが、無釉の焼き締めで、花活と思われる。

(4) 第21図

①～③は、土製の人形である。①が顔の部分。③は、台座にあたる底の部分に1ヶ所穴が穿たれている。④は石製の鍾。⑤は陶製の鍾である。⑥は洪武通宝（初鑄造、1368年）で、裏面に「二銭」の銘がある。⑧ジーファーは16cmを測る。

Ⅲ. 調査の成果と課題

羽地間切番所跡の発掘調査は、昭和60・61年度にわたって行なわれた。隣地まで土地改良工事が進むなか、番所の遺構等についてその範囲を明らかにすることが、調査団に課せられた緊急の課題であった。

調査が進むにつれ、番所の石垣遺構等が検出され、また、グスク時代の層序もわずかながら番所敷地内に残っていることが確認され、一応の成果が得られた。

そのことにより、当教育委員会としては保存へ動き出すことになるが、(1)、羽地間切番所が近世を通して羽地、国頭の中心的施設であったこと。(2)、番所の成立については学問上の議論があり、それらの課題を明らかにしていくためにも貴重な遺跡である。(3)、神道を軸にして、北の勘定納港^{カンテイナト}から親川グシク→御殿屋敷→羽地間切番所→神所屋敷→アブハミヌミヤ→田井等アサギといった遺跡が連なっている。

これらのことから、この歴史的環境、風土を生かした歴史公園として整備、保存していくことができないか、当市の都市計画課とも連携をとり番所跡の保存について調整を進めることになった。

地元、親川区公民館において、羽地間切番所跡遺跡の評価と、その保護・整備へ向けて説明会を行ない、土地改良区域から除外するよう、親川区・土地改良組合・地主へ理解と協力を求めた。

また、沖縄考古学会（会長、嵩元政秀氏）からも別紙のような保存要請が出され、現場調査も行なわれた。当市としては、本格的にその保存へ向けて動き出すことになり土地買上げについて地主と交渉に入った。

現在、土地の買上げについては地主の合意が得られていないが、土地改良区域からは除外された。しかし、神道については、新しい道を使うということで土地改良区域に取り込まれ、姿を消した。以上のようなことで、かろうじて番所跡は、敷地に関する範囲についてのみ残すことになった。

以下において、調査の成果を踏まえまとめてみたい。

番所の成立についてはまだ解明されておらず、今後の大きな研究課題であるが、今回の調査で、グスク時代の層や、中国青磁（13世紀～19世紀前半）が確認されたことで、この地に番所が設置される以前から人が住んでいたことが明らかとなった。

また、石垣遺構の一部が明らかになり、階段状に三段積の堀であったことが判明し

た。

番所へ通ずる道が確認でき、南側に、石垣と門の位置が把握された。

それでは、番所をめぐるどのような歴史が展開されたかを近世～近代前半の記録をひろってみると、1901年(明治34年)に仲尾次に移転するまで建物があった。

1735年の蔡温の指揮による羽地大川の改修の際、番所に宿泊して工事を進めた。

また、1853年、ペリー提督一行が、勘定納港から上陸して番所のある親川にやってくる。1879年の廃藩置県により、国頭地方の中心役所及び警察署が羽地番所におかれる。1900年(明治33年)には、羽地高等学校の分教場が羽地番所跡におかれる。

このように番所は、羽地の歴史上重要な場所であり、これまで不明であったことを教えてくれる貴重な遺跡である。

今回の土地改良事業で神道を失いはしたが、石垣遺構等については保存されており全面発掘調査により、番所の全容を明らかにしていくことが今後の課題である。

第13表

羽地間切番所跡遺跡出土の
磁器年代表

年代		中 国	日 本
13世紀	前半		
	後半		
14世紀	前半		
	後半		
15世紀	前半		
	後半		
16世紀	前半		
	後半		
17世紀	前半		
	後半		
18世紀	前半		
	後半		
19世紀	前半		
	後半		

名 護 市

市長 渡辺知裕 殿



昭和61年7月21日

沖縄考古学会

会長 高元政

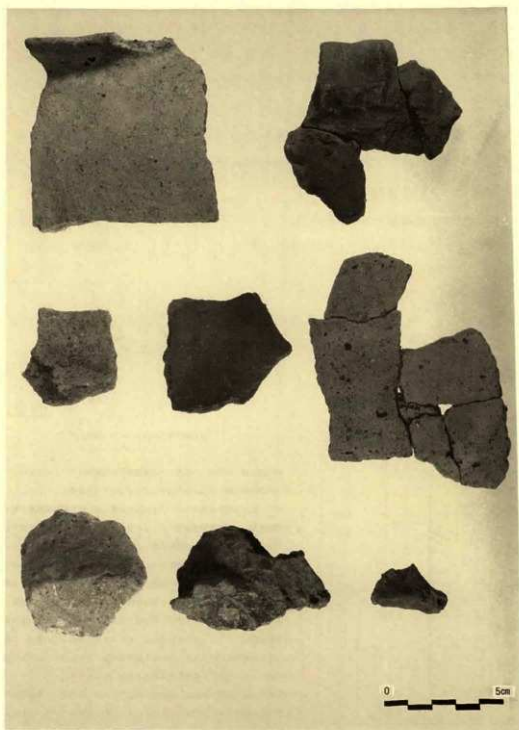


羽地番所跡の保存について(要綱)

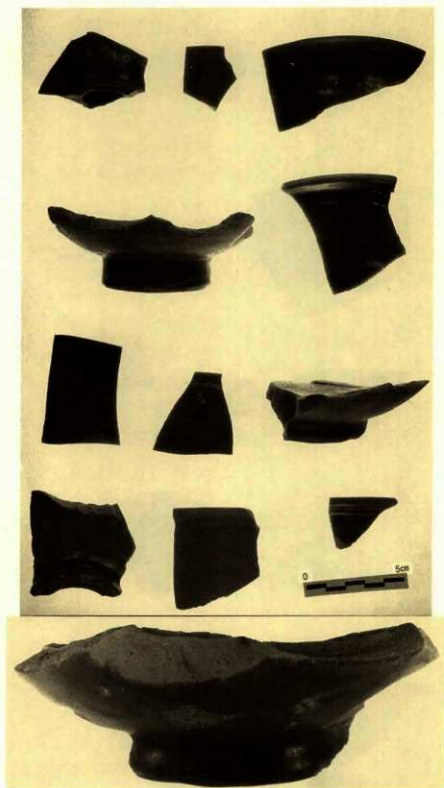
本土復帰後、沖縄県下の各地で土地改良事業が低発化し、これにともなって多くの遺跡が危機的状況におかれていることを本学会は憂慮しています。

さて、現在貴市羽地親川において土地改良事業に伴う羽地間切番所跡の緊急発掘調査が、名護市教育委員会によって実施されています。只今発掘中ですが、すでに15～17世紀の中国陶磁器やグスク時代の土器などが出土しさらに番所時代の切石の遺構なども確認されています。周知のように羽地間切番所は文献史料に数見され、復帰後にも国頭郡役所や警察署が置かれた歴史上の貴重な遺跡であります。さらに、この番所に隣接して「大神の庭」「親川遺跡」「廟内屋敷跡」「グスタアサギ」「羽地城」などが、「神道」と呼ばれる古代の宗教遺跡によってしっかりと結びつこうとベルト状に点在しています。これらは単に名護市における歴史・民俗上の重要な遺跡のみではなく、いまなお地域住民にとっても生きた精神的共有財産ともなっております。

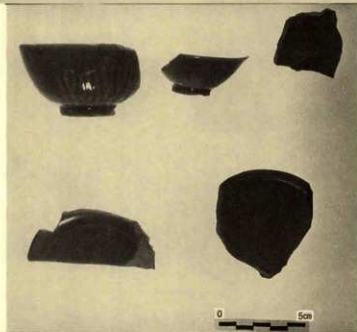
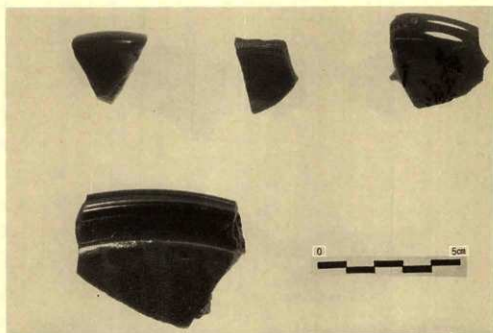
名護市長はじめ関係当局は、羽地番所跡並びにその一帯の歴史・民俗環境の重要性を再認識され、その保存に緊急かつ万全の対策を講じていただきますよう強く要請します。



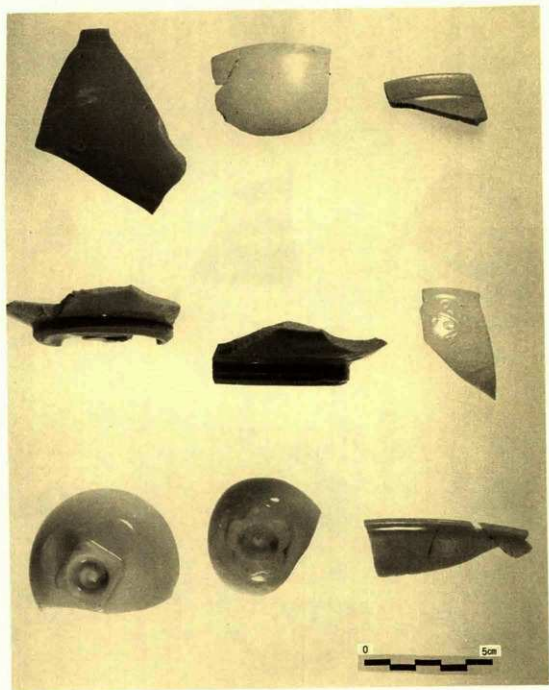
図版-1 土器



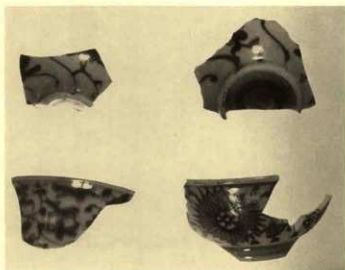
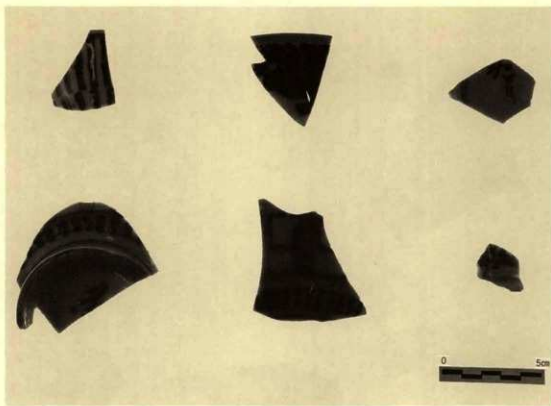
图版-2 青磁



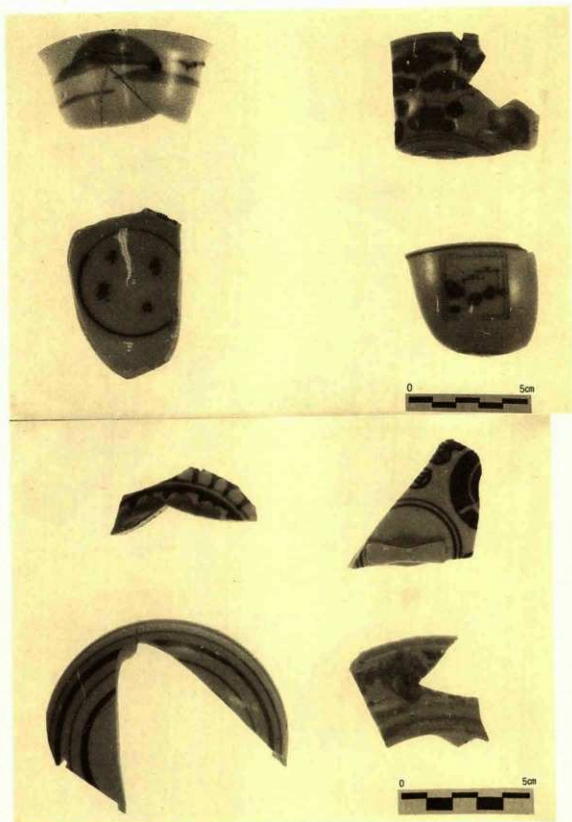
図版-3 青磁



圖版-4 白磁



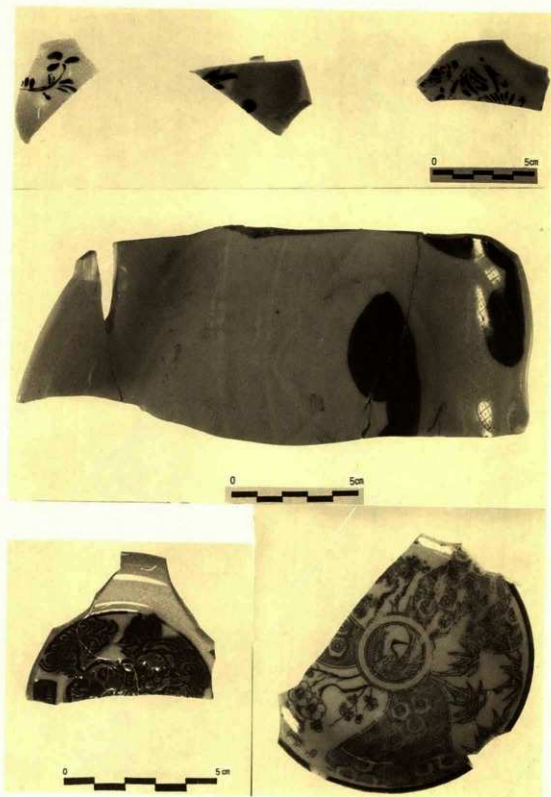
図版-5 染付



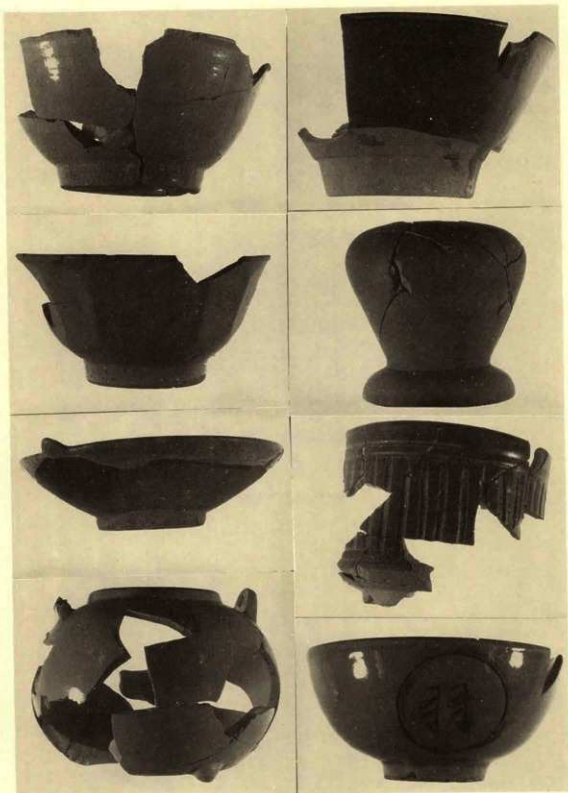
図版-6 染 付



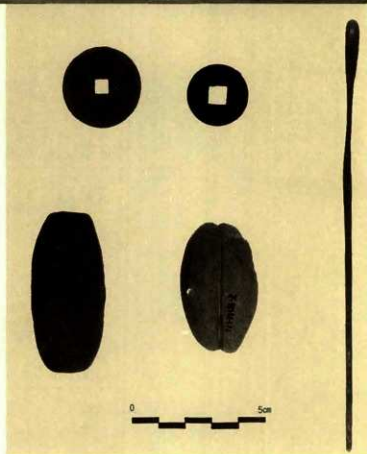
図版-7 染付



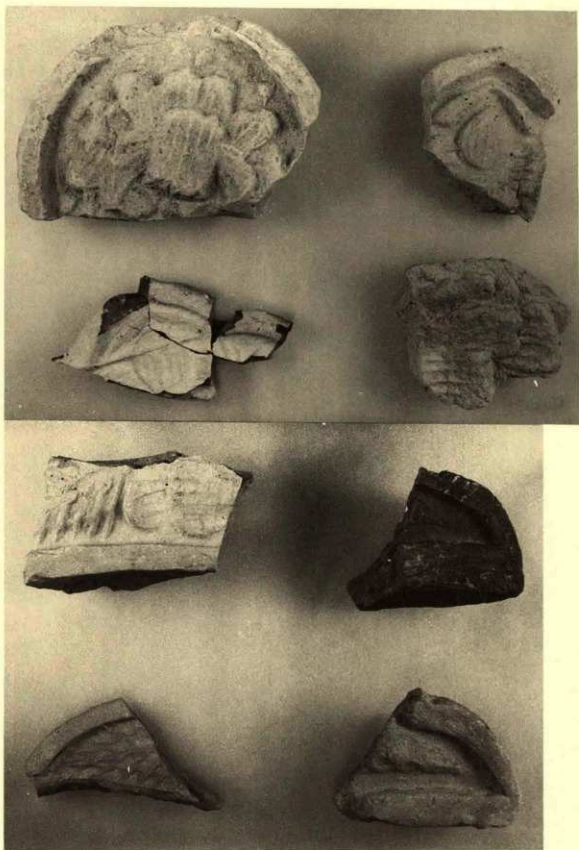
図版-8 色絵・ルリ釉・釉下彩



図版-9 沖縄製陶器



図版-10 その他(人形・鍾・古銭・ジーファー)



圖版-11 瓦

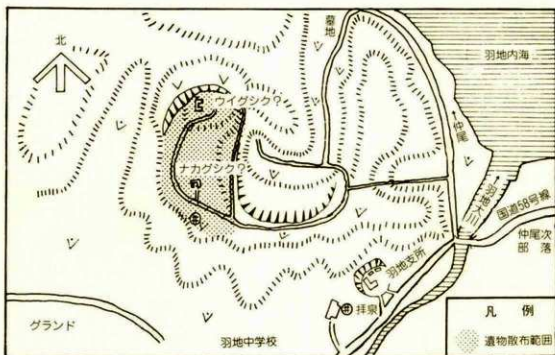
仲尾次上グシク遺跡

I. 仲尾次上グシクの位置と環境

仲尾次上グシクは、仲尾次の古村という伝承があり北側は羽地内海、屋我地島が展望でき、標高約46mの頂上を中心にしたこんもりとした森を形成している。羽地中学校の北側背後にあたる。

頂上には、ウイグシクと呼ばれる拝所があり、小さな広場をもつ。中腹あたりには、ナカグシクと呼ばれる拝所があり現在も仲尾次部落が拝んでいる。ただし、この2つの拝所の名称については、どちらがどの名称の拝みであるかについて、意見が別れている。

グシクの中は、聖域となっており、ヒージェーナワが張り巡らされている。その周辺は、以前キビ畑として利用されていたが、ここ数年は休耕地となりススキが繁茂している。南側は、ゆるやかな斜面をなし段々畑を形成し、東から北側にかけては、急傾斜になっている。



第1図 仲尾次上グシクの位置

Ⅱ．調査結果の概要

1. 発掘調査の範囲と方法

グシクの聖域としてヒージェーナワで囲れた範囲は、当初より土地改良から除外することが確認事項であったため、そこに隣接する周辺のキビ畑を主に調査することになった。地形は、ウイグシク、ナカグシクを中心に西側と南側に段々畑が広がっている。

そこで、1つの畑の区画ごとに2m巾のトレンチを設定し、層の確認と遺物の検出を目的に試掘を行なった。

グシクの本体部については、今回の土地改良事業では、まったく問題がないため、土地改良に含まれるグシク周辺の地区について試掘を行なうということで範囲を限定した。

周辺のキビ畑は、放置されたままになっているため、ススキの伐開作業に手間取ったが、調査の後半はバックホーを投入し1m巾のトレンチ発掘による方法を取った。



第2図 試掘調査区



伐開作業

2. 遺 物

(1) 第3図(土器・擂鉢)

①～③に示した。いずれも小破片で器種等については不明である。①は、外器面の調整は雑。胎土はやや粗く石英等を混入する。茶褐色を呈し、焼成は良好。③は、底部資料であるが、平底であろうか。

④～⑦は、擂鉢を示した。いずれも胴部の小破片であるが、④は焼成がもっとも良く胎土は灰褐色を呈し、還元焰焼成によって焼成されたと思われる。⑤、⑦は、酸化焰焼成と思われ、焼成は弱く、脆弱である。

(2) 第4図(類須恵器)

すべて胴部の小破片である。焼成は良好で、器表、胎土ともに灰色を呈し、胎土への混和材はみられない。①は、外面に叩きの痕跡を残す。

(3) 第5図(青磁・白磁)

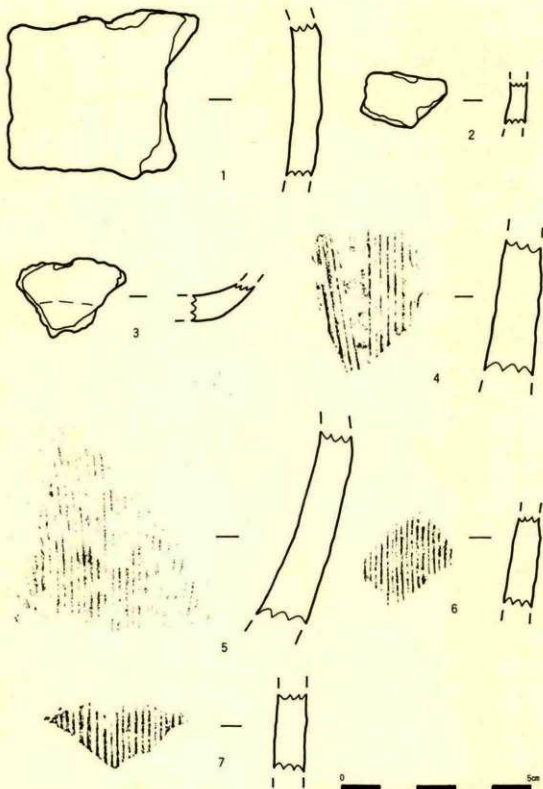
第1表で特徴を示した。①は素地、褐色を呈し、釉色は緑褐色である。②は素地、灰白色、釉色は明緑色。⑤は素地、灰色、釉色は淡緑色。⑫は素地、灰白色。釉色は明緑色。⑬は素地、白色。

(4) 第6図(染付)

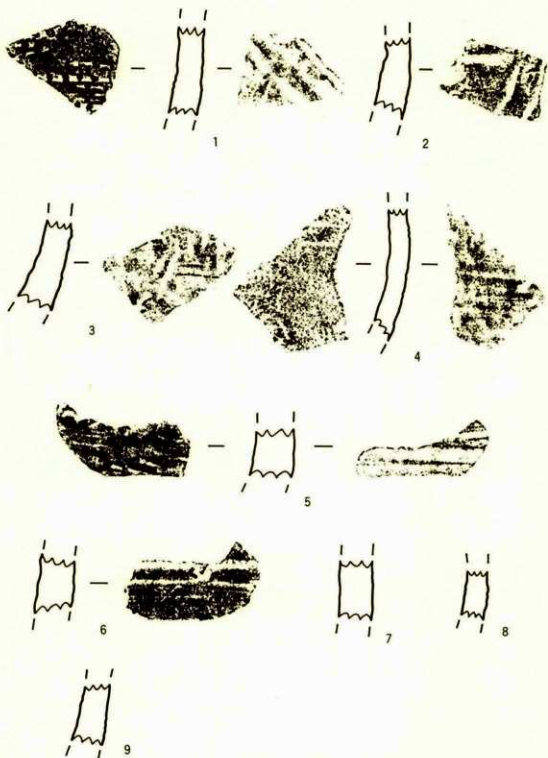
第2表で特徴を示した。①は素地、灰白色で釉は十分溶ていない。③、⑨は素地、白色。

(5) 第7図〔色絵・ルリ釉・陶器(褐釉、ワラ灰釉、刷毛目、青緑釉)〕

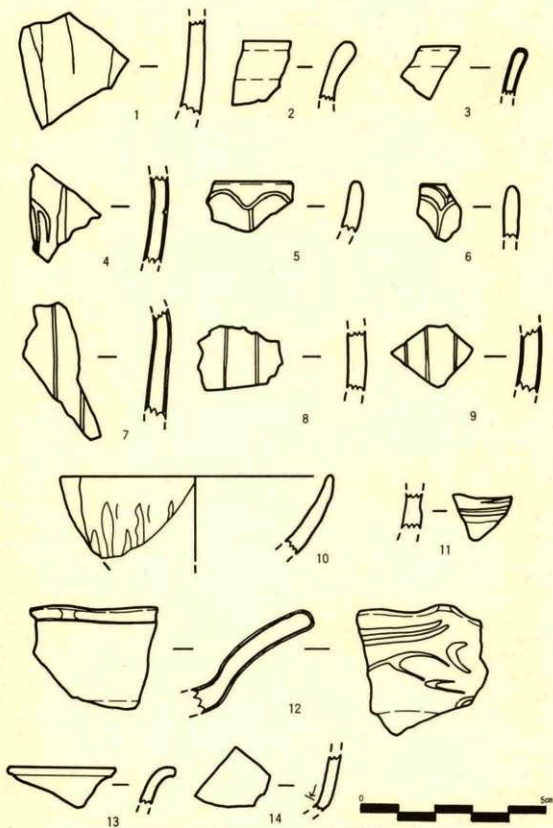
①は絵付が剥落している。②は素地、白色。③、⑤は素地、暗褐色。④、⑥は素地、灰色。



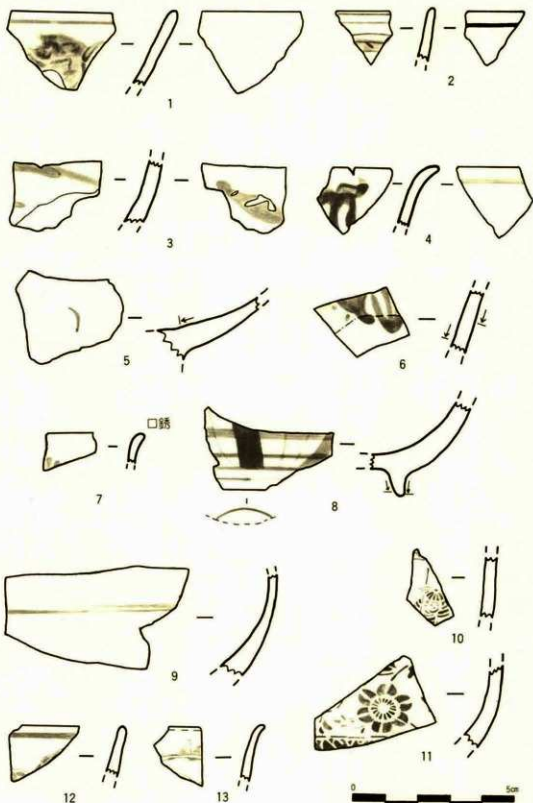
第3図(図版-1) 土器(1~3)、撻鉢(4~7)



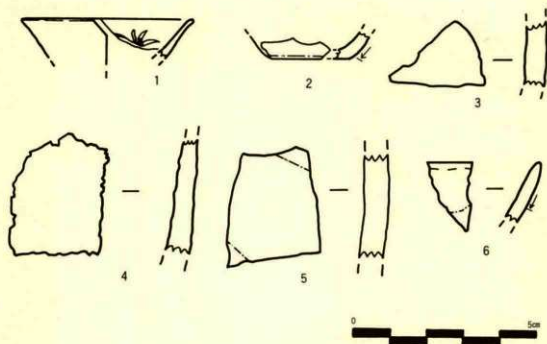
第4図 (図版-2) 類須恵器



第5图(图版-4) 青磁(1~12)、白磁(13、14)



第6図 (図版-3) 染付



第7図 (図版-3) 色絵1)、ルリ釉2)、陶器3)~(6)

第1表 ー第7図に対応する分類表ー

		器 種		年 代	備 考
磁器	色 絵	器種不明 ①	瀬戸・美濃系が	明治以降	
	ルリ釉	小鉢 ②	中 国	18C~19C	外面ルリ釉、内面透明釉
陶器	褐 釉	壺 ③	褐釉陶器否か?	中 国 が 15C~16Cが	素地 (褐褐色)
	ワラ灰釉	瓶 ④	ワラ灰釉瓶か	唐 津 系 16C末~17C初	素地 (灰色)
	刷毛目	皿 ⑤	唐 津 系	17C~19C	素地 (褐褐色)
	青緑釉	皿 ⑥	唐 津 系	17C後半~18C中葉	素地 (灰色)、内野山窯 内面刷毛目、外面透明釉

第2表 一第5図に対応する分類表一

器種		年代	備考
磁器	青磁	①	中 国 13C～14C 中葉 鉄蒔井文
		②	14C 末～15C 中葉 口縁部焼反り
		③	14C 末～15C 14C 末～15C 外蓋へラ焼文 口縁部の雲文等が
		④	15C 後半～16C 前半 外面彫刻列光蓮井文
		⑤	15C 後半～16C 15C 後半～16C 外面彫刻列光蓮井文
		⑥	15C 後半～16C 15C 後半～16C 内蓋へラ焼文
		⑦	15C 後半～16C 15C 後半～16C 口縁部焼反り
		⑧	15C 後半～16C 15C 後半～16C 見込蛇ノ目輪ハギ
		⑨	15C 後半～16C 15C 後半～16C 見込蛇ノ目輪ハギ
		⑩ クロム青磁	瀬戸・美濃所 明治以降
	白磁	⑪	中 国 15C～16C 前半 内蓋へラ焼文
		⑫ 青磁皿が	模写形、内蓋へラ焼文
		⑬	15C 末～16C 口縁部焼反り
		⑭ 小杯	中 国 16C が 見込蛇ノ目輪ハギ

第3表 一第6図に対応する分類表一

器種		年代	備考
磁器	染付	①	中 国 16C～17C
		②	肥 前 1660年～1680年代 外面、青磁文が
		③	外面青磁文が、見込煎焼文が
		④	中 国 17C～18C 口縁部焼反り
		⑤	17C～18C 見込蛇ノ目ノ輪ハギ
		⑥	18C～19C 印刷手付
		⑦ 小碗	瀬戸・美濃所 寛永～明治 口縁
		⑧	昭和
	磁	⑨	肥 前 17C 後半
		⑩	国 産 明治10年～大正 型模造
	器種不明	⑪	明治後半～大正 銅板転写
		⑫	明治後半～大正
		⑬	国 産 明治後半～大正

Ⅲ．調査の成果と課題

試掘調査の概要について述べてきたが、その成果について若干検討を加えてみたい。仲尾次上グシクは、ウイグシク、ナカグシクの2つの拝所をもつ。これまでの表面調査において、南蛮陶器が採集されているが、今回の調査で、グスク土器、類須恵器、中国磁器、日本製陶磁器などが得られた。

中国磁器は、13世紀後半～19世紀までのものが得られており、親川グシクとほぼ同時期の遺跡と捉えられる。

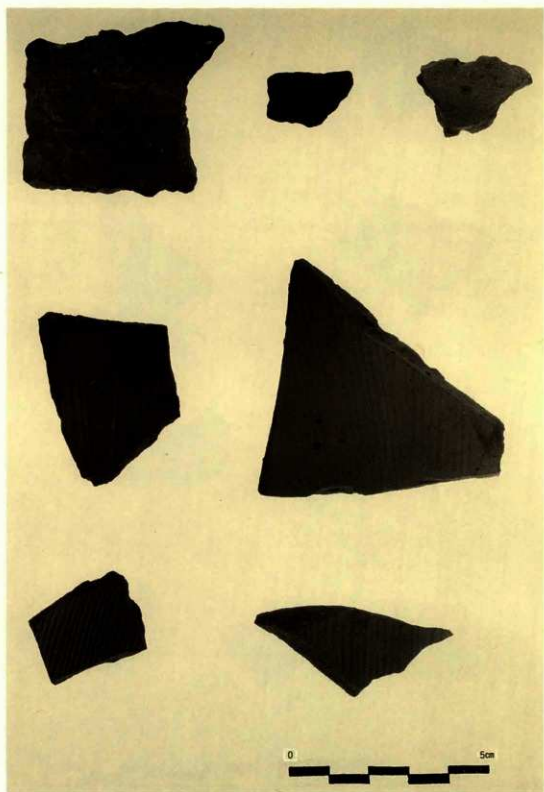
上グシクの周辺から、碗や、皿といった日用雑器類が出土することから集落があったものと思われる。

層序については、周辺がほとんどキビ畑ということもあり、攪乱を受けているものの広い範囲にわたり遺物が採集される。ただ、遺物を含む層は薄く、10cm内外の厚みでしか存在しない。この一帯は、農業機械が入りにくいこともあってそれ程深くは掘削されてないことから、もともと遺物包含層は浅かったと思われる。

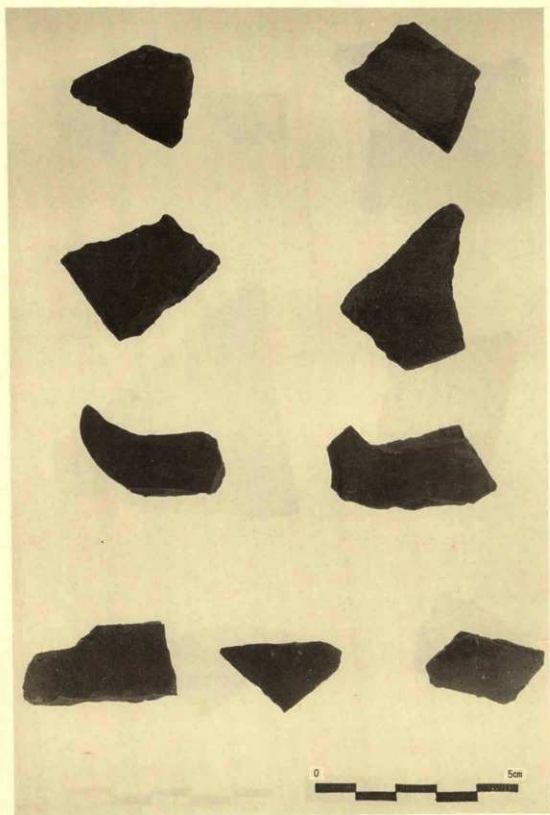
調査範囲はグシク周辺のキビ畑に限ったが、遺構等については、まったく検出できなかった。しかし、地形から判断すると、拝所を中心にムラが形成されていたと思われる。

遺物からすると、土器、類須恵器、陶磁器の出土により、グスク時代の遺跡と言える。

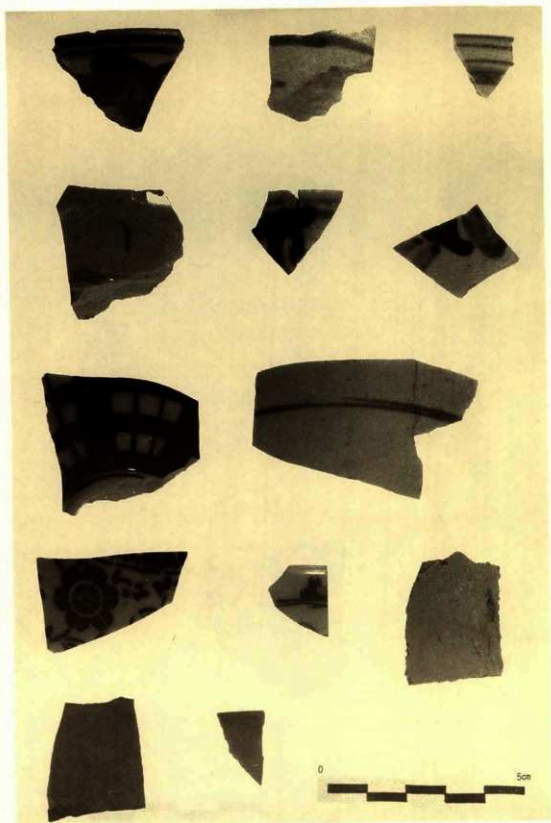
今後は、上グシクの本体部分の調査と、ここから現在の仲尾次へ移動したとされる事についての検証が課題である。



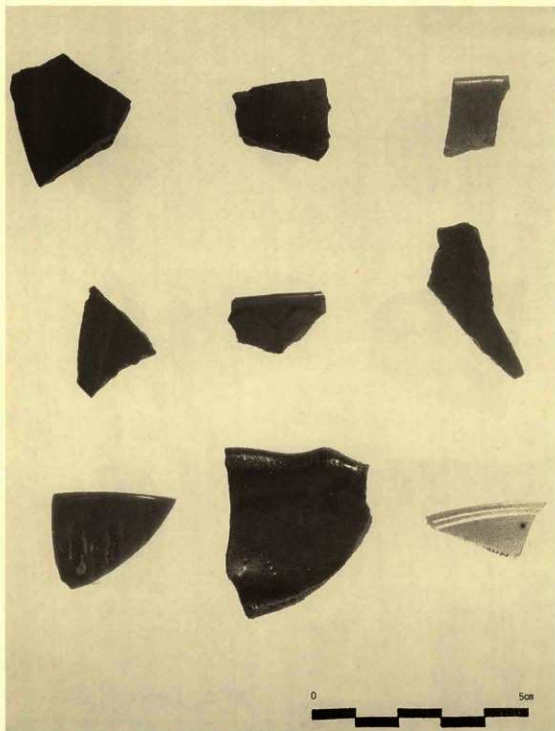
図版-1 土器・摺鉢



圖版-2 類須惠器



图版-3 陶磁器



図版-4 青磁・白磁

おわりに

昭和60年～62年度の3ヶ年に亘り、県営仲尾地区土地改良事業区域内にある4遺跡について範囲確認の為に発掘調査を行ない、資料整理作業を進めてきたが、ここに調査報告のまとめが成った。多くの方々の御指導と御協力、御助言が得られ、どうか事業の完了をみたが、今は感謝の念のみ深い。

陶磁器の資料整理を御指導して下さった佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏による、発掘調査の成果を踏まえての「陶磁の道」をテーマとした文化講演会をもつことができ、貴重な、御教示、御提言が得られた。

名護市内はもちろん、遠く中南部からも多くの市民が御参集くださり大盛会でした。

また、羽地間切番所跡遺跡の保存をめぐるには、親川区の区長さんをはじめ役員の方々、名護市役所羽地支所長、本市の文化財保存調査員、教育委員、それに、沖縄考古学会などから保存へ向けた要請がなされた。経過については、本文で述べたとおりである。

最後に、従天下で発掘作業に携わっていただきました親川区の皆さま、それに発掘現場に何度も足を運び、情報を提供して下さい、ラブ・オーシュリさん(「青い目が見た大琉球」の著者)へ改めてお礼申し上げます。



羽地間切番所跡 近景



表土除去作業



連日、見学者が訪れた



沖縄考古学会員による現場巡見

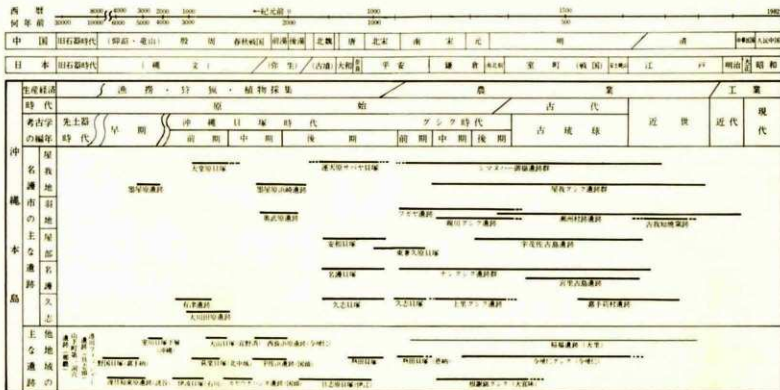


石垣遺構の検出作業



羽地間切番所の保存に向けて話し合う親川区の評議員

名護市の遺跡編年 — 時代区分表



※名護市の遺跡(2)より

目 次

第1図	名護市の位置	3
-----	--------------	---

フガヤ遺跡

第1図	フガヤ遺跡の位置	4
第2図	グリッド設定図	5
第3図	層序断面図	6
第4図	土器(胴部)	9
第5図	土器(口縁部)	10
第6図	土器(口縁部)	11
第7図	土器(口縁部)	12
第8図	土器(口縁部)	13
第9図	土器(底部)	14
第10図	類須恵器	15
第11図	類須恵器	16
第12図	磁器	17
第13図	磁器	18
第14図	その他(金属製品・キセル)	19

田井等遺跡

第1図	田井等遺跡の位置	28
第2図	調査地区	29
第3図	遺構平面及び土層壁面図	30
第4図	青磁	33
第5図	染付	35
第6図	染付(印判手)	37
第7図	染付	38
第8図	染付	39
第9図	染付	41

第10図	染付・色絵・釉下彩	42
第11図	陶器	44
第12図	沖縄製陶器	47
第13図	沖縄製陶器	48
第14図	沖縄製陶器	49
第15図	沖縄製陶器	50
第16図	砥石	51
第17図	古銭	52
第18図	キセル・ジーファー	53

羽地間切番所跡遺跡

第1図	羽地間切番所を中心とした歴史環境マップ	68
第2図	羽地間切番所跡遺跡の位置	69
第3図	土層断面図、Ⅱトレンチ西壁面図	71
第4図	羽地間切番所跡遺構平面図	72
第5図	土器(底部)	75
第6図	土器	76
第7図	青磁	77
第8図	青磁	79
第9図	青磁	81
第10図	青磁	83
第11図	白磁	85
第12図	染付	87
第13図	染付	89
第14図	染付	91
第15図	染付	93
第16図	染付	95
第17図	色絵・ルリ釉	97
第18図	緑釉・釉下彩・その他	99
第19図	沖縄製陶器	101

第20図	沖縄製陶器	102
第21図	その他(人形・鍾・古銭・ジーフアー)	103

仲尾次上グシク遺跡

第1図	仲尾次上グシクの位置	118
第2図	試掘調査区	119
第3図	土器・播鉢	121
第4図	類須恵器	122
第5図	青磁・白磁	123
第6図	染付	124
第7図	色絵・ルリ釉・陶器	125

目 次

フガヤ遺跡

第1表	第12・13図に対応する分類表	8
-----	-----------------------	---

田井等遺跡

第1表	田井等遺跡出土の陶磁器年代表	32
第2表	第4図に対応する分類表	34
第3表	第5・6図に対応する分類表	36
第4表	第7・8図に対応する分類表	40
第5表	第9・10図に対応する分類表	43
第6表	第11図に対応する分類表	45

羽地間切番所跡遺跡

第1表	第7図に対応する分類表	78
第2表	第8図に対応する分類表	80
第3表	第9図に対応する分類表	82
第4表	第10図に対応する分類表	84

第5表	第11図に対応する分類表	86
第6表	第12図に対応する分類表	88
第7表	第13図に対応する分類表	90
第8表	第14図に対応する分類表	92
第9表	第15図に対応する分類表	94
第10表	第16図に対応する分類表	96
第11表	第17図に対応する分類表	98
第12表	第18図に対応する分類表	100
第13表	羽地間切番所跡遺跡出土の磁器年代表	106

仲尾次上グシク遺跡

第1表	第7図に対応する分類表	125
第2表	第5図に対応する分類表	126
第3表	第6図に対応する分類表	126

===== 図 版 目 次 =====

フガヤ遺跡

図版-1	土器(胴部・口縁部)	22
図版-2	土器(口縁部)	23
図版-3	土器(口縁・底部)	24
図版-4	類須恵器	25
図版-5	磁器・キセル	26
図版-6	磁器	27

田井等遺跡

図版-1	青磁	55
図版-2	染付	56
図版-3	染付(印判手)	57
図版-4	染付	58

図版-5	染付	59
図版-6	染付	60
図版-7	輸入陶器	61
図版-8	沖縄製陶器	62
図版-9	沖縄製陶器	63
図版-10	沖縄製陶器	64
図版-11	沖縄製陶器	65
図版-12	砥石・古銭	66
図版-13	キセル・その他	67

羽地間切番所跡遺跡

図版-1	土器	107
図版-2	青磁	108
図版-3	青磁	109
図版-4	白磁	110
図版-5	染付	111
図版-6	染付	112
図版-7	染付	113
図版-8	色絵・ルリ釉・釉下彩	114
図版-9	沖縄製陶器	115
図版-10	その他(人形・鍾・古銭・ジーフアー)	116
図版-11	瓦	117

仲尾次上グシク遺跡

図版-1	土器・播鉢	128
図版-2	類須恵器	129
図版-3	陶磁器	130
図版-4	青磁・白磁	131

9052 -



名護市文化財調査報告-8

範囲確認調査報告 フ ガ ヤ 遺 跡
田 井 等 遺 跡
羽地周切番所跡遺跡
仲尾次上グシク遺跡

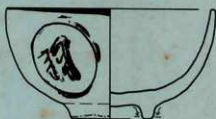
1988年 3月30日

編・発行：名護市教育委員会社会教育課
名護市字名護6492番地

☎：(0980) 53-5 4 2 7

印 刷：サキハマ印刷所
名護市字名護437番地

☎：(0980) 52-2 7 4 0



T.M